第五部　戦場に連れ去られた日本娘たち

第一章

1、北九州戦場慰安隊　2、須藤美和子　3、三村さち子
4、河合さと子　5、H姉妹　6、仙台では——青春グループ
7、北海道千歳町

1　北九州戦場慰安隊

キャンプ・ハカタのオフィサー・クラブ、サージャン・クラブ、セクレタリィ・サーヴィス、キャンプ・メッスなどで働いていた日本女性、またフライデイ、イタヅケ、アシヤ飛行基地などに勤務していたタイピスト、看護婦、メイドたちは、朝鮮戦争がはじまって

三ヵ月ほどたったころ、「君は二週間ばかりベースに泊りこんで働いても、家族その他から苦情がでることはないか？　家族や友人は君の言うことを何でも無条件で信用するか？　君は共産主義および北鮮の侵略者についてどう思うか？」という意味の、三ヵ条からなる奇妙な質問書に答えを書きこむよう要求された。

質問書は一見何でもない粗末なザラ紙で、監督やガードや係の下士官が「あ、君、ついでだがちょっとこれに書きこんでくれないか？」というふうに、ひとりひとりにごくむぞうさに手渡され、彼女たちが書きこむやいなやひったくるようにして回収されたものである。

一日のいそがしい仕事に疲れきっていた彼女たちは、いいかげんに書きこんだあと、そんな紙きれのことなんかたちまち忘れてしまった。かなり批判力をもっている女性までが、「どうせまたいつもの思想調査だろう、二週間泊りこんで働くことができるかどうかという、忠誠テストみたいなものだろう」ぐらいに考えて、たいして気にはとめなかった。

事実、朝鮮戦争の開戦いらい、訊問や質問書や家庭調査などの形式で彼女たちの思想を調査することが、ほとんど三日おきぐらいにおこなわれていたのである。（有名な某仏人記者の話によると、当時の米軍の徹底的な敗北は、共産軍の強大さによることもさることながら、日本の各戦闘基地に多数の共産側スパイが送りこまれているためだ、というふうに米軍首脳部では考えていたから、当然彼女たちの思想調査も厳重且つひんぱんにおこな

われたのだ、ということである。）したがって、基地に働く日本人はじつにしょっちゅう首を切られ、また新しくやといいれられて、つねに変動していた。だから彼女たち全部にこの質問書が手渡されたといっても、手渡された直後に首を切られた者もあり、ちょっとおそくはいってきたため手渡されずにすんだ者もあった。そういったさまざまの理由のために、この奇妙な質問書は、質問を発した何者かの意図のとおり、その後も問題にされるようなことはまったくなかった。

しばらくたってから、彼女たちの首切りが、今度はやや大量に、系統的にはじまった。長女とかひとり娘とかいわゆる良家のお嬢さんのような女性が真先にやめさせられた。はやく家にかえらないと親が心配するような家庭の娘もやめさせられた。戦争や軍事基地について、少しでも批判的あるいは良心的な考えかたをしている娘もやめさせられた。もっとも、これらの女性たちがやめさせられていく一方で、これらの女性たちと同じ条件や境遇の娘たちが新しくどんどんやとわれていたから、個々の人員が変動しているだけで、彼女たち全部の数や仕事には何の変りもなかった。誰が見ても、この人員入れ換えは全然無意味なものであった。

しかし、なおも入れ換えがつづけられていくあいだに、何者かの意図どおりの結果がだんだんあらわれてきたのである。第一に、新しくやといいれられた女性たちは、自分たち

がやとわれるまえにキャンプやベース内でおこったこと――たとえば奇妙な質問書がばらまかれたとか、あるいは首をきられた自分たちの先輩がほとんど全部アメリカ兵の暴行を受けていたとかいうようなことを、ほとんど知らなかった。第二に、これら何も知らない女性たちにまじって、非常に特殊な環境にある女性たち――少くともれいの質問書の答えをそのように書いた女性たち――家族がみんな戦災で死んだとか、関西の方からひとりでやってきて福岡の街のなかに下宿しているとか、家庭が複雑なために一ヵ月や二ヵ月帰宅しなくとも家族が心配するようなことはないとか、これからずっとキャンプに泊るということを電話か何かで知らせておけば、いつまでだって家族が信用しっぱなしでいるとか――いう女性たちだけが首をきられないで残ったことになる。

これはれいの質問書だけでなく、家庭調査やそのほかいろんな秘密調査を参考にして、首をきらなくてもいい女性の範囲を徐々にしぼっていったものらしく、最後にのこった女性たちは、みんな戦災孤児だったとか、たったひとりの情夫と別れてアパートでひとりぐらししているとかいった、ほんとに特殊な事情のある者ばかりになってしまった。

しかし彼女たち自身は、新しくはいってきた女性たちとすぐ親しくなったから、とくに自分たちだけがとりのこされているということを、あまり意識しなかったようである。

そんな女性たちの数が、はじめにあげたキャンプやベース全部で何人いたか明言することはむずかしい。入れ換えがじつに巧妙・複雑におこなわれたので、調べれば調べるほどわからなくなってしまうのである。彼女たち全部が一ヵ所に集められてでもいたら比較的わかりやすいのだが、集められたことはいちどもなかったらしい。だからここではただ、彼女たちは相当数――少くとも百人から百七、八十人ぐらいは――いたとでもいっておくより仕様がない。

以上のような前置きを一応のみこんでおいてから、個々の事例について考えてみると、事件の全貌は少しずつ明らかになっていくであろう。

まず、アシヤ基地で働いていた日下（久坂？）テイ子（？）向井ヤス子（？）など六人ないし九人の看護婦とメイドが、一九五〇年十月の十五日または二十日ごろ（不確実。ともかく零号作戦がはじまってからである）、野戦病院の衛生兵の数が急に足りなくなったから、という口実でダグラス輸送機（又はB29？）に乗せられ、朝鮮へ運ばれていった。その後、彼女たちの消息まったくなし。

それから二三日たって（又は十日ぐらいたって）、同じくアシヤ基地の？　ヨシ子・太田エミリィ？・ふさ子など六人～十二人の女性が、好きな兵隊について朝鮮へ行け、という命令（誘い？）を受けて、同じく輸送機で朝鮮へとびたった。この女性たちの消息も全然ない。

また、多分十一月にはいってから、キャンプ・ハカタに勤めていた七人（六人？）のメイドが、兵隊といっしょに輸送船に乗せられて、朝鮮へつれてゆかれた。このことについてはインディアナ出身のワイル・グラハム軍曹（Sergent Wile Graham）ほか二名の兵隊が、この事件の取材中にちょっと話してくれた。彼女たちは輸送船のなかで、士官および下士官のたえまない暴行を受け、船底の隅の方に裸のままころがっていた。仁川に部隊が上陸したとき、彼女たちもいっしょにつれられていったが、その後の消息は不明。

同じく十一月にはいってから、キャンプ・ハカタのタイピストおよびメイド十人ぐらいがイタヅケから輸送船で朝鮮へ送られた。彼女たちの消息もまったくなし。

さらに同じころ、イタヅケ基地に働いていた二十数人のメイドが輸送機で京城へ送られた。この女性たちの消息はいくらかわかっている。しかしそのあとやはりイタヅケから送られた五人のタイピストについては手がかりが全然ない。

そこで、ひとつだけはっきりしている事例を報告しよう。これは前記のワイル・グラハム軍曹、およびイタヅケ基地に働いていた三人の女性が断片的に話してくれたものである。それによると——

キャンプ・ハカタに勤めていた藤島悦子（二十五？・クラブ・メイド。出身地等不明）は、ほかの三人のメイドとともに、十一月十三、四日ごろ、輸送機で朝鮮へ送られた。四

人とも家庭の事情その他の条件がそろっていたことはもちろんである。朝鮮へ送られたおもてむきの理由は、京城または仁川の旅団司令部でしばらくのあいだ——朝鮮女性のメイドがみつかるまで働いてもらうためだ、ということになっていた。この四人のうち二人はスペシャル・メイドまたはアルバイト洋娼だったが、悦子ともうひとりはそうでなかった。

……彼女たちは、しばらくたって、仁川の海兵師団司令部にあらわれている。そこの上級士官たちの個室に、彼女たちはひとりずつメイドとしてつききっていた。グラハム軍曹がある日、それらの個室が並んでいる廊下を通りかかると、そのうちのドアのひとつが開いて、乱れた服装の日本ムスメと、それを追うようにパジャマ姿の士官がとびだしてきた。士官は「エッコ！」と叫びながら軍曹の眼の前で彼女をとらえ、強引に部屋にひきずりこんでドアをしめた。

作戦のために部隊が移動をはじめたとき、士官たちは悦子ら四人を連れてジープに乗っていた。京城南方のK6高地というところで、部隊はリッツ砲兵旅団の何コ大隊かが移動するのと行きあったが、その砲兵部隊にも十人ばかりの日本ムスメがくっついていた。（グ軍曹の話から推すと、このムスメたちが前にイタヅケから輸送されたメイドたちだったらしい。）彼女らはみんな絶望的な眼をし、疲れきった様子だった。悦子たちとこのムスメたちとは——全然知らないどうしらしかったが——抱きあって大声で泣いていた。しかし兵隊た

ちはそれを無情に引きはなし、ひとりの士官は悦子ら四人を拳銃でなぐった。

……翌日、部隊は北鮮軍の戦車隊と接触した。バズーカ砲とロケット砲で三十分ほど応戦したのち、部隊は退却しはじめた。ジープが動かなくなったので、士官や悦子たちもトラックに乗った。やがてトラックも動かなくなったので、みんな歩かなければならなかった。戦車はもう追ってこなかったが、あたりは全部北鮮軍だった。ラジオで所在をたしかめた友軍の方へ近づこうとして、彼等はいそいだ。狙撃に応射しているうち、彼等の数はだんだん減っていった。夕方、グ軍曹がふと気がついたとき、ムスメは二人に減り、悦子が負傷したもうひとりのムスメを肩にかついでいた。悦子自身も負傷しているらしかった。……やっとのことで危険地帯を脱したとき、彼女たちはもう一歩も動けないようにみえた。そこへたしか、一五一五歩兵大隊の支隊らしいのがトラックでやってきたので、グ軍曹はムスメたちをトラックへ乗せて連れていってくれるようにたのんだ。

「どこにいる?」その歩兵の下士官はだみ声で言った。「俺たちは戦闘にいくんだからムスメたちの世話はできん。しかしムスメたちがいるというのはいいことだ。」そして歩兵たちはみんなトラックをおり、もう虫の息になっている二人のムスメをめちゃめちゃに犯した。そのときふたたび北鮮の戦車がやってきたので、彼等はぜんぶ二人のムスメを見捨てて敗走した。グ軍曹はいくらか気がかりだったが、やっぱり歩兵のトラックに乗って逃げた。

彼はいまでもその場所をおぼえているという。

……これが、グラハム軍曹の記憶による、藤島悦子の最期であった。(類似例不明)

2　須藤美和子

一九五〇年九月のある夜、須藤美和子(十七・佐世保)は、船舶会社の夜業を済ませてから、駅と川のあいだにある家に向って、急ぎ足であるいていた。近廻りするために海岸の方へでていったことが、この悲劇をひきおこすもとになった。

海岸は淋しかった。でも十分もあるいたころ、自分の家のある町の一割の灯が見えはじめてきたので、彼女はほっとした。彼女のあるいている道から海までは八メートルぐらいあった。

突然、岸壁の下でエンジンの音がきこえたので、彼女はちょっとびっくりした。しかしそこらにモーター・ボートがいたりするのはよくあることだったから、ふりむきもせずにそのままゆきすぎようとしたとき、岸壁の上におどりあがったふたつのくろい影が、おそろしいいきおいで彼女におそいかかった。……彼女はなぐりたおされ、夢中ではね起きて五

六歩走ったが、今度は前からきた大男にかつぎあげられた。助けをよぼうとするまえに、もうひとりがとんできて彼女の口へハンケチを押しこんだ。息ができなくなった。彼女は大男の髪をつかんでひきちぎろうとしたが、いきなりどこか固いもののうえへ手荒く投げだされ、(死ぬかもしれない)と瞬間思ったような激しい痛みを感じ、そのまま気が遠くなっていった。

ほんの何分間か気絶していたのだろう。意識がもどってくるとともに、彼女は誰かに馬乗りされているのを知り、とび起きようとしたが、体は動かなかった。ハンケチはいつのまにか口から半分ひきだされていたので、辛うじて呼吸はできた。上に空が見え、星がひかっていた。(モーター・ボートに乗せられたんだな)と彼女は思った。とたんにエンジンの大きな音が耳にとびこんできた。

彼女のうえにのっかっているのはアメリカ水兵だった。馬乗りといっても、まだ犯していたわけではない。彼はハンケチをとりのけ、彼女が泣き叫べるようにしてから、じつにいやな声でわらった。

いくら泣き叫んでみてもだめだった。それでも声をかぎりに叫んでいると、頭の方にいたもうひとりの水兵が、何かで海水をすくって彼女の顔にざぶりと浴せた。彼女が苦しそうにもだえるのをみてげらげらわらった。「アイ・ラブ・ユウ!」とひとりが言ってまた海水

を浴せた。彼女の背中は船底の海水のなかにひたっていた。やがてモーター・ボートは、一隻の軍艦(駆逐艦または掃海艇?)にぴたりと横づけになった。水兵が「ホホー!」と叫ぶと、うえの方からも「ホホー!」という声が落ちてきた。彼女は軽々とかつぎあげられて甲板へ運んでゆかれた。抵抗する気も失せて、彼女はされるままになっていた。

甲板の大砲(?)のかげに彼女は放りだされた。濡れた服を脱がされ、ズロースが投げ捨てられ、凌辱された。何人に犯されたかはおぼえていない。それは長く、とても長くつづいた。また気を失ったのかもしれなかった。

……

彼女は誰かにゆすぶられていた。眼をあけると、彼女と同じように、真裸で、眼を泣きはらした娘が彼女のそばにいた。娘は眼をそらした。その視線をたどっていったとき、彼女は向うの大砲(?)のかげにも三四人の娘たちがころがされているのをみた。

彼女はひくい声でその娘と話した。夜間高校のかえり、突然拳銃をつきつけられてボートに乗せられ、ここまで運ばれてきたこと、家で心配しているだろうこと、許婚の男がこれを知ったらどんなに怒るだろう、いっそ死んでしまいたい、と思うこと、佐世保の灯があまりにも遠くにみえていることなど……話しているうちに二人はいつか抱きあい「死のうね! 死のうね!」といいながら泣いていた。

夜が明けそめたころ、また水兵たちがやってきて輪姦をはじめた。その前に彼女たちは一ヵ所にかたまったが、全部で七人連れてこられたことがわかった。このときは美和子は、必死の抵抗をこころみたけれども、そばでさかんに抵抗していたもうひとりの娘が拳銃でうたれたのをみると、全身がすくんでしまい、おとなしくなった。一時間ほど輪姦したあと、彼等は六人の娘を裸のままモーター・ボートに放りこみ、拳銃弾を受けて苦しんでいる娘は本船の船底へつれていった。この娘が誰だったのか、その後どうなったのか、かいもくわからないが、それほど重傷ではなかったらしい。モーター・ボート（前のより大型だった）には五人の水兵が乗りこみ、すぐ走りだした。ボートは三十分ほどで相の浦川口に着き、そこの岸壁に六人を残して走りさった。

彼女たちはほとんど裸だった。ひとりがワンピースを着、ひとりがスカートとブラジャーだけしていたが、あとはみんなズロースさえなかった。彼女たちはその場にしゃがみこんだ。美和子はしゃくりあげて泣いていた。

と、そこに洋娼らしい女がやってきて、「可愛想に、海軍（ネービー）にやられたんだろ？　待ってなさい、いま着るものをもってきてあげるからね」といった。すぐにまた、ちがう女があらわれて同じようなことをいい、それから人相のわるいおやじがやってきて同じようなことをいった。……十分もすると三四人の女たちがねまきのような着物と下駄をもってきたので、

六人は礼をいってそれをひっかけ、ひとまずその女たちやおやじの家へはいり、熱いお茶をもらってのんだ。

「落着くまでここにいてもかまわないよ」とおやじがいうので、六人はしばらくその家にいることにした。とてもこのまま家にかえられないような気がしたからである。死のうと思う気持はうすれていたが、この災難をきれいさっぱり忘れて前の生活にもどっていける自信もなかった。……六人は一部屋をあてがわれてぼんやり座っていた。「何だったら、ここで働いてくれてもいい」とおやじは巧みにもちかけてきた。美和子だけがそれを断り、あとの五人は何となくここで働くことにきまってしまった。

するとおやじや、その子分らしい四五人の与太者は、手のひらをかえすように急に美和子を粗末に取扱いはじめた。着物と下駄の損料なんと五千円（彼女のひと月の給料に近い金額）！——をたったいますぐはらえ、と責めたてるので、彼女はついに決心して家へ呼出電話をかけ、兄と弟に五千円もってむかえにきてくれるようにたのんだ。兄弟の顔をみたとたん、彼女は口もきけないほどに泣きはじめた。いつのまにか十人以上の与太者があたりをとりまいていたので、兄妹三人は早々に五千円はらい、あともみないで逃げだした。

翌日兄と二人で警察へいってみたが、「相手がアメリカさんじゃ」というわけでうけつけてくれなかった。さらに海軍基地へいって訴えたときも、「夢でもみたんじゃないか。米国海軍

にそんな不心得者はいない筈だ」といわれただけだった。しかしその翌日ジープが兄妹をむかえにきて、CICにつれてゆき、そこで係官が、「お前たちは共産主義者か？――夢でもみたんじゃないか。米国海軍にそんな不心得者はいない筈だ」とくりかえした。

それから毎日同じ時間にジープが兄妹をむかえにきて、同じことがくりかえされた。三十五日間、毎日同じ経過がくりかえされたのだった。気狂いのようになった彼女が、ある日、あれは夢だったかもしれませんと口走ると、それからジープはむかえにこなくなった。しばらくして彼女はいっしょに犯された娘のひとりと街でであい、「その後あのおやじの家から二人逃げだしたが、あとの三人は借金にしばられて水兵の客をとらされている」ということをきいた。しかし彼女はもう警察へも基地へもゆかなかった。（類似例不明）

3　三村さち子

三村さち子（十四・佐世保）は、戦争未亡人の母親が病院の付添婦をして弟妹を養っている貧しい家計を助けるため、中学を長期欠席して、母親には新聞売りをやるといつわって、ポン引をはじめた。五〇年の十一月であった。小路のつきあたりやバーの裏などのわかりにくい場所に住む洋娼から頼まれて、街をうろつくアメリカ兵や国連兵に、「ヘーイ、ジョー、アイノウ・ムスメサン・ハウス」とよびかけ、Where?（どこだ？）とちかづいてくる兵隊を「ニヤ、ヴェリチープ！」といいながらつれていく。兵隊がかえったあとで彼女は洋娼から五十円～百五十円もらった。少いときでも一晩二百円にはなったので、彼女の一月のかせぎは母親の倍であった。自分が母親よりも多く金を持ってかえることは母親の誇りを傷つけるだろう、と彼女は自信たっぷりに考え、月に二千円ほど家へ入れるだけであとは自分で使った。前からほしくてたまらなかった、洋娼の着るようなぴかぴかした服を買って洋娼にあずけ、夜になるとそれを着て街角に立った。それを着ると急に大人になったような気がして、口紅や白粉もつけてみたくなった。ティーンという洋娼の家でお化粧してもらうと自分ながらとてもきれいにみえた。そこへ兵隊が三人やってきて、一人がティーンと性交しはじめた。それを眼の前にみてがたがたふるえているさち子を、他の二人が真裸にし、荒々しく処女を奪った。彼女はその二人から千円もらったが、あとでティーンに部屋代五百円を支払わねばならなかった。

それから毎晩、彼女はティーンの家にゆき、ティーンはベッドの上で、彼女はタタミの上で、兵隊とねた。彼女が洋娼になったため、そのかいわいのポン引が足りなくなったので、彼女は級友の松本ケイ子（十四）をつれてきて自分の代りにポン引をやらせた。しばらくするとケイ子も同じ道をたどって転落していった。

さち子はティーンから部屋代をとられるのがばからしかったので、母親が夜十一時すぎでなければ病院からかえってこないのをさいわい、弟妹がねむったあと、兵隊を自分の家につれてきて体を売るようになった。妹の英子（十二）はねたふりをして兵隊と姉の様子をうかがっていた。英子はきれいな服を着た姉をうらやましいと思った。

ある夜、兵隊と抱きあっている最中に母親がかえってきた。「友達よ、この兵隊さん」とさち子はいったが、ごまかしきれなかった。あとで母親はおいおい泣いて娘を打った。するとさち子は突然反抗的になって、千円札を母親の前でみせびらかし、「ぶつんならぶってよ。これがなきゃお米も買えないくせに」とわめいた。母親はいつまでも泣いていた。

この日から、さち子の売春は公認となった。弟妹たちは勉強部屋から追いだされて、縁側にねるようになった。一月ほどしてさち子はラジオとアイロン——母親がほしがっていたものを買った。母親は病院からかえってから、兵隊のズボンをそのアイロンでプレスしたりした。そのころ妹の英子は新聞の売子になると嘘をついてポン引をはじめていた。

（類似例多数）

5　河合さと子

河合さと子（二十四・福岡県）は、佐世保のパンパンハウスで働いていたが、五一年の九月、主人（業者）の手先である与太者数人につれられて、十人ばかりの仲間といっしょに北の方へ旅立たねばならなかった。前借金でしばられていたので業者の命令を拒むことはできなかった。行先は知らされなかった。

汽車が呉につくと、与太者たちはおり、交替の与太者たちと彼女たちとおなじようなみなりの女がやはり十人ほどのりこんできた。神戸までゆくとその与太者たちはおり、また交替の与太者たちとそれにつれられた女たちとがのりこんできた。さと子はきっと横須賀か横浜でおろされるのだろうと思っていたが、横須賀でも横浜でも東京でも水戸でも、ただ与太者が交替し、女たちがのりこんでくるだけだった。話しあってみると、女たちはそれぞれの土地のハウスで働いていたといい、行先を知っている者はひとりもなかった。彼女たちの話の内容は、相手の兵隊の自慢や性的な露骨な冗談ばかりで、行先の心配や業者への批判などひとことともきかれなかった。強姦から転落への経路をふんださと子は、のがれようとしてものがれられない鉄鎖——戦争・アメリカ兵・業者・与太者・前借金——につながれた、しかしそんなことについてはひとつも考えずにふざけあっている、自分も含めた百人ちかい仲間に、たえがたい怒りと同情と情なさを感じた。

仙台までいって、やっと彼女たちはおろされた。監視の与太者は六人きりだったので、

にげようと思えばかんたんににげだせるのだった。しかし彼女たちは与太者のいうとおり従順にまた汽車にのり、駅をぶらぶらしているアメリカ兵たちに職業的な秋波をおくった。

それから三時間ほどして、一行は見知らぬ小さな駅におりた。あたりには一面のりんご畑がつづき、その真ん中にじつにそぐわない恰好で大きな米軍キャンプと飛行場が展開していた。駅の名は「じんまち」であった。

この小さな村には、彼女たちをむかえいれるための新しいハウスがすでにたっていた。そこにはいって一週間ばかりくらすうちに、朝鮮がえりだというアメリカ兵の大部隊がやってきて、村はいっぱいになった。彼女たちはすぐあたらしい環境になれ、あたらしい相手にもなれて、夜ごと村じゅうを毒々しい嬌声のなかへたたきこんだ。彼女たちは、アメリカ兵と彼女たちのためにこの小さな村がどんな影響を受けたか、全然考えてみようとはしなかった。

さと子ひとりについていえば、彼女はこの村にきてからいくらか運がひらけた。ある下士官が彼女を身受けして、りんご畑のなかにある農家の一部屋に彼女をかこってくれたからである。農家のひとはみんな親切で、彼女もそれにこたえるため、よぶんの金をはらい菓子や煙草をプレゼントした。その家ではやがてりんご畑をキャバレーの敷地に売りはらい、納屋をふたつに仕切ってさらに二人の女に貸した。彼女はいちどならず、その家の子

供たちが彼女と下士官の情交の様子を、障子のかげからうかがっているのに気づいた。しかし下士官が何とも思わないらしいので、彼女もだんだん何とも思わなくなった。車中で感じた怒りや情なさは、情婦（オンリー）としての生活が深まるにつれて、だんだん消えうせていった。

（類似例二十二）

6　H子姉妹

H子（希望により匿名・十七・じんまち）の家では、せまい畑と二十何本かのりんごの樹をもっていたが、家族が八人もいたので生活はいつもどん底だった。農地改革でともがくこれだけの土地は手にはいったものの、もとの地主にはまだたくさん借金があった。H子は美しかったので、彼女を女中によこすなら借金は半分に減らしてやると地主がいうのだったが、彼女はそれだけは死んでもいやだった。彼女は朝から晩までりんごの樹にしがみついていっしょうけんめい働きつづけた。

しかし、アメリカ兵の大群がやってきて、村のあちこちにハウスやバーがたつようになり、わらぶきの屋根にネオンをつけたりする農家がでてくるようになると、近所となりの家は競争のようにハウス業者へ土地を売ったり、洋娼に部屋を貸したりしはじめた。H子

の家でも何とかして部屋貸しをしたいと思ったが、六畳二間に八人が住んでいるのでは、場所の余裕がまったくなかった。それまで現金収入のほとんどなかった近所の農民たちが、アメリカ煙草をのみ、時折千円札をみせびらかすようになったのをみて、H子の両親はあせったり絶望したりした。

「あいな女子ども(おなご)ァ、わけえのに一晩しぇんえんもにしぇんえんもかせぐどわ。感心だェ」いつか父親がよっぱらってこういったとき、彼女はりんご畑へとびだしていって長いこと泣いた。

しかし、彼女が丹精こめてそだてたそのりんご畑も、やがて彼女の家のものではなくなった。地主が借金のかたに取りあげて、キャバレーの敷地として売りはらったのだ。りんご畑ばかりでなく、麦と野菜を作っていた畑もぜんぶとりあげられた。「それだけェは待ってけれ。そればとられたらあスたから食っていがれねくなるよわ。このどおり泣いでたのむじゃ、待ってけェれ」頭を土間にすりつけてたのむ父親に、地主は「うンだら娘ばだしぇ、おめえどこにば四人も娘いるでねえか。三人どもだしえば野菜畑ば待ってける、だしぇ」といった。H子は頑としてきかず、自殺しそうなけはいまでしめしたので、地主もとうとうあきらめ、野菜畑とひきかえに彼女の四つ上の姉と一つ上の姉とを馬車にのせてはこび去った。

しかし、こうして口が二つ減ったかわり、りんご畑と麦畑がなくなったので、生活はいっそうくるしくなった。H子がかわいがっていた二十何本かのりんごの樹は、ある日、キャバレーの主人が男たちをつれてきて半日で切りたおしてしまった。それをみながら彼女はもう涙もでなかった。きりたおされる樹のそばにじっと立っている彼女を見て、大阪弁のキャバレーの主人は、「おまえ、キャバレーへはいりたいのとちゃうか？　すこし英語がでけるならすぐ使うたるぜ」と話しかけてきた。彼女はすごい眼つきで彼をにらむと、あてもなく走って逃げた。

そのキャバレーができあがりかけたとき、キャバレーの主人はもういちどやってきて彼女にキャバレー入りをすすめ、また野菜畑のところが洗浄所を作るためにぜひ必要だからゆずってくれ、と現金をならべた。母親はわなわなふるえる手でその現金をつかみながら、「こればもらえば庄屋（地主）しゃまにごしゃかれるでのう、庄屋しゃまの方さもってってけれ」といった。キャバレーの主人は薄わらいをうかべて母親の手をはねのけ、「貧乏者の子沢山とは、よういうたもんや」と、その金をもって行ってしまった。

こうして、野菜畑もとりあげられた。親戚をまわってすこしずつ米やいもを借りてあるき、一家はやっとのことで生きていた。そしてついに、ある日やってきた二人の洋娼に部屋をぜんぶ借すことにきめ、家族は土間の片隅にわらを敷いてそこにごちゃごちゃとかた

まることにした。

二人の洋娼は、さっそく移ってきて部屋を改造しはじめた。真赤なカーテンがかけられ、鏡台がはこびこまれた。彼女たちは靴のままタタミの上にあがり、その靴をH子の弟や妹がみがくたびにガムやら十円札やらをくれた。H子も彼女たちのよごれたハンケチやズロースなどを洗濯して、三十円や五十円ときには百円もらった。彼女たちのはらう部屋代で、子供たちのPTA会費や地主の死んだ弟の香典などを、やっとはらうことができた。

しばらくして、父親は秋田の飯場にやとわれてゆき、母親は山形の砂利運びの土工として働くことになった。H子は地主の家の畑をたがやしたり、大高根基地まででかけていって弾丸の薬莢をひろったりした。地主はしつこく彼女につきまとったが、彼女はいつも危機いっぱつのところでのがれた。二人の姉はどちらも地主の子供を宿していた。

疲れきってかえってきても、あるのはいもと豆だけだった。弟姉はいつも腹をすかせて泣き顔をしていた。カーテンの向うの洋娼の部屋からはうまそうな牛肉のにおいや煙草の煙がながれてくる。「なしてあねさもパン助さならねのしゃ?」と十二の妹がふしぎそうにきいた。彼女は黙ってこたえなかった。洋娼のはらう部屋代は、このごろでは全部地主がまきあげてしまうのだった。

ある夜、土間の隅に焚火をしてねむろうとしていると、表戸を破ってアメリカ兵がふたりはいってきた。彼等は洋娼の部屋にいたふたりのアメリカ兵と何か笑いながら話したあと、とつぜんH子と妹を部屋にひきずりあげ、押し倒した。前からいた兵隊たちと洋娼は、酔っぱらっていたためかどうかわからないが、H子と妹の手足をおさえて身動きできないようにした。「助けて!」と叫ぶH子に洋娼たちは、「結局この方がしあわせなんだから、おとなしくしな」といった。二人のアメリカ兵はかわるがわる、姉妹を犯した。

長いあいだこらえつづけ、守りつづけてきたH子の小さな抵抗も、ここでついに終りをつげた。彼女はとなりのキャバレーへいって十日ほどただで働いたあと、そこの主人の紹介で、三沢のパンパンハウスに売りとばされていった。彼女の妹は姉のあとをうけてキャバレーで働き、まだ小さかったけれど女の数が足りないときはアメリカ兵とあそんだ。彼女は十三才何ヵ月かで中絶し、仙台へ街娼になりにいった。(類似例九)

7　仙台では——青春グループ

仙台では、朝鮮戦争のぼっぱっ以来、米軍の数が八千人から千人ぐらいにまで減り、洋娼たちは大部分、九州・関西・東京周辺の戦闘基地へ移動していたが、五一年の六月、新聞にもでたように一万七千人をこえる第十六州兵軍団が仙台市内と郊外の二つの基地に進

駐してきたので、突発的な売春ラッシュがまきおこった。

もちろん、既存の売春婦と売春施設はことごとく動員された。東八番丁の和娼窟では軒並みに「日本人おことわり」の注意書きを貼り、小田原の和娼窟では肉体代をつりあげて日本人をしめだそうとした。（この時期になじみの女のところへでかけていった日本人の男は、みんな業者にみつからないように、女と米語で話さなければならなかった。）キャンプ勤め――強姦――街娼の経路を通ってきたユーコ（二十六・宮城県）は、ホテルの一室で一晩に十三人のアメリカ兵を相手にし、スペシャル・メイドから転落したミリイ（二十六・東京）は同じく一晩に十九人を相手にした。ダンサーたちはことごとくアメリカ兵と関係し、小さなバーやキャバレーは大急ぎで小部屋の増築をはじめ、洋娼めあてのアパートが一日十一軒の割りでふえてゆき、国電仙石線の沿線には彼女たちの住むバラックが毒きのこのように密集しはじめた。

キャンプは千人のメイドを募集し、スペシャル・メイドの数も上昇線をたどりはじめた。それまで七百人程度だった洋娼の数は六月千二百人、七月二千六百人、八月三千三百人、九月三千九百人、十月四千二百人と急増をつづけ、全市は洋娼一色にいろどられるにいたった。

ダンスホールSにあつまる何人かの女性が、「青春」という名のグループを作って、男たちとだいたんな交際をしていた。はじめは小さな存在だったが、Sへやってくる女性たちの約半数――七十人――がそれに加入し、やがてSばかりでなく、T、N、L、U、Aなどのダンスホール、キャバレー、ダンス教習所等々にあつまる女性たちもそれに加わってくるにおよんで、青春グループは一種の社交的勢力に育ちはじめてきた。とはいえ、なにもおもてだって存在を表明しているのではなく、メンバーはホールのなかでたがいにウインクなどで通信しあい、ダンスの相手を紹介しあったり、英会話を習ったり別にどうということもないグループだったのである。しかしちょうどそのころに十六軍団の進駐があったために、グループの女性たちは踊りにくる米兵たちとたちまち親しくなっていった。ダンスホールは別に日本人の男をしめだしたりしなかったけれど、実際に踊っているのは米兵たちと青春グループのメンバーだけだった。たまに日本人の男と踊っている女を見ると、青春グループの女性たちは、露骨ではないがはっきりとわかる方法で軽蔑の念をしめした。

向出敏子（二十三）もそのグループのひとりで、豊かな家庭に育ち、立派な両親や兄弟をもっていたのだが、純粋な恋愛であると信じてドンファンのアメリカ兵に処女を奪われ、四日で捨てられたのち、なかばヤケになって、メンバーから紹介されるほかの兵隊たちと、踊ってはホテルへ、また踊ってはホテルへ、というふうな生活をはじめ、だんだん職業的な洋娼に転落していった。春日久子（三十二）も同じくグループの一員で、夫――二人の

あいだには倦怠期がきていた――の出張の留守にホールで美しい兵隊と知りあい、自動車のなかで関係した。そんなことがたびかさなって結局夫と離婚し、ダンサーになり、その兵隊と同棲していたが、やがて捨てられ、そのまま転落してしまった。

長谷川かく子（三十四）はほかのグループ・メンバーや二、三人の兵隊と映画を見ていたとき、隣席に座っていた兵隊に誘惑され、ホテルで関係し、それを契機としていろんな兵隊とあそびまわるようになった。このようにして百五十人のメンバーのほとんど全員が、公然たるあるいは秘密の洋娼に化していった。彼女たちのなかには大学教授の夫人も、会社員の奥さんも、オフィスガールも、重役のお嬢さんも、大学生も、高校生もいた。

しかし、こんなグループが活躍してもなお、アメリカ兵全部の欲望を満たすには充分でなかった。キャンプに新しく勤めた女性たちは一月もたたないうちに凌辱され、誘惑され、または恋愛によってアルバイト洋娼に転落していった。そのうち、オンリーになってキャンプをやめる者のあとへは、キャンプへ就職をのぞむムスメたちがひきもきらず押しよせた。売春業者は九州・関西の同業者に応援をもとめ、十月までに五百人ないし六百人の洋娼を主として佐世保・呉・福岡・別府などから受けいれた。全市的に建設されたバーやカフェーやキャバレーは、失業中の娘や農村の娘を吸収することによって、すべてパンパンハウスとして登場、十一月にはいって肉体の供給はやっと需要とつりあいがとれてきた。（類似例十六）

8　北海道千歳町

北海道・千歳町にも、五一年の五月、米州兵師団がとつじょ進駐してきた。千歳は既存の売春婦や売春施設をまったく持たなかった町である。そこで最初に（司令部が厳重に取締ったにもかかわらず？）多数の婦女暴行事件が発生した。ひとつひとつの具体例を書いていてはきりがないからさしひかえる。強姦はあらゆる場所でおこなわれ、五才の幼女や六十二才の老婆に対してさえもおこなわれた。当時の千歳の一般女性約三千のうち、強姦された者〇・八％、かろうじて凌辱をまぬがれた者十四・五％いたずらされた者五十七％、そしてまったく害を受けなかった者わずか九％であった。

やがて少数の街娼たちが札幌・小樽などからやってきた。この連中は一晩に十人も十五人ものアメリカ兵を相手にしてぼろ儲けをやった。つづいて横須賀・横浜などの洋娼が侵入してきた。

そのうちに札幌の業者と北九州の業者とのあいだに連絡がついた。当時、作戦上の要求

から朝鮮にふたたび大量の兵力が投入されていたので、佐世保、福岡などで過剰になった洋娼たちは、一日平均百名ずつ、急行列車で千歳へ送られてきた。彼女たちの数が二千五百人ぐらいになったときには、既に千歳の町は前に住んでいたひとがみてもわからないほど完全に変貌し、五百軒をこえるハウスやビヤホールが町じゅうにたちならんでいた。

第二章

完全軍事基地化の仕上げ・戦闘基地から新設基地へ・売春ラッシュ・洋娼等の爆発的増加・なぜこんなにふえたか？　中小売春業者の発生

前記の零号作戦が成功をおさめそうにみえたとき、米軍の首脳部は、おそくとも五一年の二月までに北鮮を壊滅させ、勝利のうちに戦争を終ることができると信じていた。ところが、優秀な共産空軍が増強され、中共義勇軍が戦闘に参加するにおよんで、この予想はまったくうらぎられ、戦況は絶望的なものとなり、泥沼のような長期戦を覚悟しなければならなくなってきた。そこで米軍の首脳部は、ぼう大な兵力を戦線に投じて短期間に勝敗

を決するというそれまでの行き方をやめ、日本に待機する新手の部隊と前線部隊とをたえず交替させて戦線を維持しながら、他方米国のための将来の防衛線としての日本の完全軍事基地化を急速に押しすすめ、さらに米軍のたてとしての日本軍の再建を日本人に強制するという、より根本的な行き方をえらぶことになる。

戦闘の経過からいっても、共産・米軍両側とも、新しい作戦をひかえて戦線を整理中だったから、戦線の維持に必要な兵力だけをのこして、米軍、国連軍は、続々と日本にひきあげてきた。占領の初期と同じような速さで、彼等は日本中にみちあふれ、軍事基地の数はみるみるうちにふえていった。

それとともに洋娼の数もふえはじめた。恐慌期のどん底には四万人台を割った彼女たちが、ふたたびおそろしい勢いでまんえんしてきた。五一年の二月には五万人を、三月には六万人をこえ、五月には八万人を六月には十一万人の、そして、七月にはついに十二万五千人の線を突破した。つまり日本の女性たちは、五一年の二月から七月までの六ヵ月間に一日平均四二〇人の割で洋娼に転落していったことになる。

洋娼のこうした爆発的な増加は、全国いっせいにおこったものではなく、完全軍事基地化が南日本から北日本へ、また大都市の周辺から農村や漁村へと押しすすめられていくにしたがい、新設あるいは拡充された個々の基地を中心として、いわば連鎖的にひきおこさ

れたものである。そしてこの連鎖的増加は、ほぼ次のような経過をたどって展開していったといえるであろう。

㈠　開戦のすぐあと、戦闘基地に集中した既成の洋娼たちは、米軍が朝鮮からひきあげてくるにともない戦闘基地を捨て、米軍が帰ってきた基地へ移っていく。これは、彼女たちの数が戦闘基地の兵隊たちの数をはるかに上まわっていたことや、朝鮮からひきあげてきた兵隊たちが何ヵ月分かの俸給と戦場手当をそっくりふところにもっていたことなどに原因がある。恐慌期に一時的に転業したり、景気がよくなるのを待ちかまえていた女たちも、もちろんカムバックしてくる。しかし米軍はさらに続々と帰ってきて、新設拡充されたそれまで名も知られてなかったような基地へ腰をおちつけたから、既成の洋娼たちはそんな農村・漁村の基地へものりこんでいった。

このときまで――だいたい五一年の一月ごろまでは、洋娼の新しい発生はそれほどいちじるしくない。したがって既成の洋娼は思う存分荒かせぎをやり、一晩に何十人もの兵隊を相手にしたというような話があちこちの基地できかれた。

㈡　しかしやがて、新設・拡充された基地で働いていたメイドやタイピスト、またその周辺のバーやキャバレーで働いていた女たちが、職業的な売春婦として登場してきた。彼女たちは職場を捨てるが、その空席は基地を中心とした相当大きな地域（これは固定した

地域でなく、洋娼への転落者がふえるにしたがってだんだん大きくひろがっていった。）からあつまってくるメイド、タイピスト、ダンサー、女給等々の志願者によって、より大きい規模でたえず補充されるために、新しい洋娼の増加は持続的となり、またたえず拡大しようとする傾向をもつようになる。

こうした傾向のゆきつくさきは、肉体という商品の過剰であり、商品価格の下落である。ところが都合のいいことに、ちょうどそのころ新しい基地がまたどこかにできあがるから、あぶれそうになった洋娼はそっちに移動していく。あぶれた洋娼がでていったあとの基地では、正常な肉体需給関係が復活しその価格も一時正常にかえる。

㈢　だが洋娼への転落が持続的・拡大的である以上、まもなく肉体の供給はまたも多すぎるようになり、あぶれる者ができてくる。しかしそのころはさらに新しい基地がどこかにできあがっているから、あぶれた洋娼はそちらへ移動していく。基地A・B・C・Dがあってがいちばんさきにでき、Dがいちばんあとにできたとすれば、さらに基地Eができたとき、あぶれた洋娼のEへの移動は、A・B・C・Dいずれの基地からもおこなわれたことに注意しなければならぬ。だから、日本の完全軍事基地化が終りにちかづいたころ新設・拡充された基地（たとえば千歳）には、全国の基地から既成の洋娼があつまってきたのであった。

かくて連鎖的・加速度的洋娼の増加は、とどまるところを知らなかった。完全軍事基地化がだいたい完了してからも、しばらくのあいだは惰性的にふえつづけた。新しい基地ができなくなると、あぶれた洋娼は移動するあてがなくなり、ちょうど農村の過剰人口がせまい田畑にしがみつくように、おのおのの基地にしがみついた。朝鮮で（有利な条件で休戦にもっていくための）新しい作戦がはじまり、在日米軍の兵力は五一年七月の二十数万人を頂点としてふたたび減少にむかったが、ほとんど物理的な力であとからあとから押しだしてくるようにさえ見える洋娼の方は、なかなか減らずに十万～十二万人の線を上下していた。こうした情勢は、そのまま第二の売春恐慌期へつきすすんでいくかにみえたので、彼女たちのうちのある者は実際そのことを覚悟したほどである。五二年の四月、講和条約が発効したときも、この状勢にあまり変化はなかった。が、やがて不思議にも第二の恐慌は起らずに、新しい局面がひらけてくることになるのだが、それは次の章で説明される筈である。

いったい何が原因で、こんな異常な増加がひきおこされたのだろうか？　根本的な原因が、在朝鮮米軍の日本への大量引揚げと、日本全土の完全軍事基地化とにあったことはいうまでもあるまい。そのまた根本的な原因が、朝鮮戦争そのものにあったことも疑いのな

いところである。もし朝鮮戦争がはじまらず、したがって米軍がたくさん日本にきたり、日本全土が軍事基地化されたりしなかったならば、洋娼の数は四七年以来開戦直前までの均衡状態――やめたり死んだりした分をうめあわせるだけの安定した状態のまま、きっとふえも減りもしなかっただろうから。……つまり洋娼の増加が米軍の増加のみを原因としておこるというのであれば、占領の初期には洋娼はこの時期の二倍以上にふえなければならなかったはずなのだ。

それが実際は、この朝鮮戦争の時期の終りの方が、かえって占領の初期の約二倍以上にふえている。だから、米軍の増加は洋娼の増加そのものの根本的な原因かもしれないけれど、米軍の増加に対する洋娼の増加の割合は、何かほかの原因によって左右されるものだということがはっきりしてくる。

あとの方にのせてある統計を見れば解るように、日本占領の初期には生活苦から洋娼に転落した女性、つまり社会的な原因から洋娼になった女性が多いのに反して、一九五二年、日本が独立した前後には「派手な生活をしたいから」「アメリカ兵とつきあっているうち、何となく」洋娼になってしまったという、つまりどっちかといえば心理的道徳的な原因から転落した女性が圧倒的に多くなっている。そこで五二年より一年はやいこの時期のこうした異常な増加の原因も、生活苦よりも、むしろ彼女たちの虚栄心にあったであろうことは、

ほぼ確実に推定されるけれども、この時期の完全な統計がないから、推定以上の強い言葉をここで使うことはさしひかえたい。部分的な調査は各地の新聞社などがやっていて、それはすべてこの推定を裏づけるようなものばかりである。しかし、全国的な完全な統計はどこにもないらしい。わたしの調べた五二年の統計では、五百人のうち二四七人がこの時期に転落した女性たちだったから、この女性たちだけを対象にしてグラフを作ってみても、やっぱりこの推定を裏づけるような結果がでてくるのである。しかし、わたしには、この推定を断定にまでもっていく勇気はとてもない。

それは怖しいことだ。つい先の売春恐慌時代には、洋娼たちは「みんな血のにおいのする」アメリカ兵を嫌っていたではないか。それなのに、この時期に洋娼になった女性たちは、みんな人殺しをしてきたアメリカ兵たちとつきあっているうち、「何となく」体を売るようになったり、彼等が人殺し行為とひきかえにもらってきた俸給や戦場手当で「派手な生活をしたいために」転落していったというのだろうか。

この時期のはじめに基地から基地へ移動してあるいた既成洋娼たちは、その多くが大業者の支配下にあった。つまり完全街娼形態からまだ離脱しないでいた洋娼たちだったのである。五十人・百人・時には五百人もの洋娼群を貸切列車で移動させたり、新しい基地に

たちまち洋娼ホテルを作りあげたりするような大がかりな仕事は、ひとり大業者の資本と顔によってのみ可能とされることであった。この背後に銀行や地方ボスの手が動いていたことはいうまでもない。たとえば九州きっての売春業者であるK――自由党の地方職員――が東北や北海道の新設基地に七百七十人の洋娼を移動させたときには、C銀行・F銀行が移動資金および新設基地での洋娼ホテル建設資金としてそれぞれ二千万円程度を貸し出している。(この金は七ヵ月後に全額返済され、Kはさらに銀行に二千五百万円を預け入れた。全国的に見れば、この時期に銀行が大業者に融資した金額はおよそ二〇億円にのぼっている。(これだけあれば五十年度に受けた全国の水害のあとをみんな復旧することができたろう。)

大業者の支配下にあった既成洋娼とは、さきにのべたごとく、完全街娼形態からまだ離脱していなかった洋娼たちのことである。いいかえるならば、大業者は、完全街娼形態からまだ離脱していなかった洋娼たちのみを、その支配下にもっていた。しかもこの時期の大業者の精力は、もっぱらこれら既成洋娼を移動させたり、新しい基地で彼女たちによるかつての慰安所的なホテルを建設したりすることにそそがれたため、この時期のなかば頃からふえはじめた新しい洋娼たちを自分の支配下に吸収する余裕がなかった。同時にこれらの新しい洋娼たちの方もその既成洋娼とちがって発生原因が生活苦よりもむしろ虚栄心

からであったから、前借金その他の搾取で苦しまねばならぬ大業者の支配下に入らねばならぬ必要を感じなかった。

だからこの時期にふえた新しい洋娼たちは、大業者とはたいした関係をもたないわけである。このことは、新しくふえた洋娼たちを搾取する者が誰もいなかったということではない。新設、拡充された多くの基地の周辺に、毒きのこのようにたちならんだ安っぽいキャバレー、ビヤホール等々が、彼女たちの一部を女給・ダンサーとして吸収した。これらの家では、彼女たちに売春するための部屋を与え、高い部屋代をしぼりとる。洋娼の数がふえてゆくにつれて、バーやキャバレーですらない純然たるパンパンハウスができはじめ、彼女たちの他の一部はそれに吸収されてゆく。さらに残りの一部は基地ちかくの一般家庭に部屋を借りてすむようになり、のちにはこうした一般家庭も、だんだん職業的なパンパンハウスに転化していった。

これらのひとびとも洋娼の搾取者であることに間違いはない。しかしその搾取のしかたは大業者とことなり、むしろ洋娼たちに寄生する性格を露骨に示している。大業者は保守党の地方ボスであり、軍需会社の株主であり会社の重役であり大地主だから、たとえ売春業をやめても一向に困らないが、しかしこの時期にふえた新しい洋娼を相手とするこれらの売春業者たちは、洋娼がいなくなればその日からなみの失業者になりさがるわけである。

もちろん、中にはきわだって悪らつな儲け方をやって、大業者に匹敵するような大きなパンパンハウスを作りあげた者もないではないが、農地を演習地に奪われたため、やむなく洋娼に部屋貸ししして食っているような農家などは、たとえそれが職業的であろうとも搾取者だといいきることは到底できないのである。

このように、中小売春業者が搾取的であるよりもむしろ寄生的であったことは、新しい洋娼たちに一種の誇りを持たせた。五一年の二月、私が千歳、仙台、東京などで会った百人ちかくの洋娼たちは、ひとりのこらず、「あたいたちが稼がなきゃ、日本人は生きていけないよ」と、真剣な口調で語り、それを心から信じているらしく思われた。

第六部　「独立」はしたけれど……

第一章

1、新村照子　2、ルキ　3、永井たき子　4、リッティ
5、加茂きぬ子　6、トウキョウ・セブン・ローズイズ

1　新村照子

キャンプ・クロフォードのウェイトレスだった新村照子（二十二・札幌）は、純潔をふみにじられそうな危険をいつも感じながらも、貧しい家計を助けるためによく身を守って働いていた。米兵をきらうメイドやウェイトレスたちは、照子をリーダーにして「真珠会」というグループを作り、挑発的な態度や服装をさけたり、ドライブに誘われても拒絶した

りして、小さな抵抗を続けた。しかし「真珠会」が作られた五一年の五月から一年のあいだに、会員の数は三十一人からたった五人に減り、首になることを怖れて秘密にしていた「真珠会」の存在も、凌辱によって堕落したもと会員の口からキャンプじゅうにひろまってしまった。

ある日五人は、情報課の二世士官と日本人ガードの隊長によばれて、「米日親善に反するような行動をとるからには、お前等は赤だろう。もしそうじゃないというなら、真珠会を解散し、ほかの娘たちと同じようにもっと兵隊に親しめ。命令に従わなければ、軍は今日限りお前等を解雇し、身柄をCICに送る」と言い渡された。五人は首を切られるのが何よりこわかったので泣きながら会を解散し、「これから米日親善に協力します」と一人一人誓約書に署名してやっと釈放された。(とくに釈放されたと書いたのは、五人がよびつけられた部屋には鍵がかけられ、士官とガードは武器を持って立っていたからである。)

それから十日ほどたって、タイピストとウェイトレスたちは全員、ガードの部屋によびだされた。そこにはガードのほかに、サングラスをかけた得体の知れない日本人がひとりいた。その男はにやにや笑いながら、「昨日、講和条約が調印されたことは諸君も知っていることと思う。そこでこれを機会に、われわれ日本人が米軍に対して抱いている感謝と尊敬の念をヒレキするため、キャンプ・クロフォード親ぼく会では、諸君とともに今夜札幌の

クラブに下士官全員を招待し、講和感謝大ダンスパーティをひらきたい。士官のかたがたはその筋の主催する謝恩会に臨まれる筈だから心配はいらぬ。今日は勤務を早めに切りあげるように庶務係の方へ話しておいたから、諸君もすぐ支度をしなさい。やがてトラックがむかえに来る。――講和のことは新聞で読んだだろうが、やさしく言えばつまり諸君たちも兵隊さんと天下晴れて愛しあえるようになったということだ。兵隊さんと愛しあっているひとにはアメリカの市民権があたえられるという法律も、近いうちにできるようになっている」といった意味のことを、米語と日本語をちゃんぽんにして喋った。娘たちの多くは歓声をあげた。

照子は思いきって、「あなたは何者か？　またパーティに加わるのはウェイトレスとしての義務か？」と男に問いかけたが、その声は「赤っていやだね」「文句があるならやめたらいいのに」というガードや娘たちのざわめきでかきけされてしまった。

トラックが来たとき、照子は二人の仲間といっしょにそっと姿をくらまそうとした。が、意地のわるい女たちが監視しているのでだめだった。彼女が頬紅もアイシャドウもつけていないのを知るとその女たちは、「ヘン気取ってら」と笑った。彼女は勇気のない自分を悲しいと思った。

トラックは札幌の市中を走り、一見、邸宅風の家の前でとまった。中へ入るとそこは大

きなダンスホールになっていて、奥には酒場があり、二階には小さな部屋が沢山あった。
下士官たちはすでに来ていてあいさつをかわすまもなく、すぐに踊ったりキスしたりしはじめた。「お部屋の用意ができておりますから、お泊りの方はボーイから鍵をお受取りになってください」と拡声器がくりかえしどなった。一度だけ日本の警官が入ってきたが挙手の礼をしてすぐ出ていった。
照子もそのあとについて出ようとすると、与太者が二人現れて「帰ったらクビだぞ」とすごい声でつついた。「お巡りさん、助けてください」と彼女は言ったが、与太者が「このスケは赤でね。ひとつきたえ直さにゃ」とせせら笑うと、警官は彼女を憎々しげににらみつけただけで行ってしまった。
やさしい顔をした、しかしドンファンだというので評判の下士官が、彼女に踊ってくれと頼んだが彼女は断った。しかし、なおもしつこくせまってくるので、彼女はカッとなってその下士官の頬を打った。と、さっきの与太者が走ってきて、「何をする！　無作法な！」と彼女を叱りつけ、下士官には「必ずあなたの希望通りにいたしますから」とペコペコした。「エチケットを知らないね」とささやきあっている女たちのなかを、彼女は泣きわめきながらほとんどかつがれるようにして小部屋まで引きずられていった。ドアに鍵がかかり、下士官の手でスカートをはぎとられると、彼女の全身の力はぬけてしまった。彼女は化石

のようになって辱しめをうけた。下士官が出ていくとき、彼女は「こんなことをされても、わたしには何もいえないの？」とだけきいたが、下士官は大笑いしてこう答えた。「そうさ。日米安全保障条約ってのができたからな。」（Security Pact――安全保障の約束――という言葉は、一種のスラングとして、あらかじめその夫の了解をえたうえで他人の妻と情交関係をむすぶ、ことを意味する場合がある。）
彼女はそれからも何回か彼に身をまかせた。彼女はなかばあきらめていたが、そのたびにできるだけの抵抗はした。彼ばかりでなく、その友達の下士官にも彼女は二度犯された。
「キャンプに勤めていなければたべてゆけない、とかんがえたのは、わたしの間違いだったのではないだろうか？　キャンプで働くひとよりもずっと少い給料をもらって、工場や小さな店で働いてくらしてるひとだってたくさんいる。キャンプに勤めて暴行を受けたことを嘆いたり怒ったりするまえに、何の気なしにふらふらとキャンプに勤めてしまった自分のことをもういちど反省する必要があるのではないだろうか？　キャンプでなくたって、ほかにさがせば働く場所はいくらでもあったかもしれないのだ。もしそれがないとしたら、日本じゅうの娘はみんなキャンプに勤めなければならない筈ではないか。真珠会などというグループをつくってレジスタンスをやりながら、わたしはキャンプに勤めているということとそのなかでレジスタンスをやっていることと、二つのことに二重に自己陶酔してい

たのではないだろうか？」

彼女はそんなふうに反省してみた。実際、彼女の周囲を見まわしてみても、ぜひキャンプに勤めなければその日から飢える、というような動機でキャンプにやってきた娘はほとんどいないといってよかった。

「またそんな動機でキャンプに勤めた娘なら、きっと自分をもっと大事にして、真珠会のような組織にも積極的に参加し、誘惑と暴行をふせぐために団結したにちがいない。ひとりひとりの娘がその気になってしっかり団結していさえすれば、暴行はぜんぶ防ぐことはできないまでもずっと少くなるだろう。積極的にそれをしないということは、キャンプにはいった以上そういうことがあるかもしれないし、あっても仕方がないといった、あきらめのような、あるいは怖いもの見たさのような一種の消極的な期待の気持が、キャンプに勤める娘たちの心のなかにひそんでいるからではないのだろうか」

だから暴行する兵隊たちはもちろん悪い。しかし毎日のように暴行事件がひんぱつしているのは、こっちにすきがあるということも理由のひとつになっているのかもしれない。……彼女はここまで考え、深い傷にあえぎながらも、ともかく新しい出発をするためにキャンプをやめたのだった。（類似例二十一）

2　ルキ

ルキ（二十六・宮城県）はチェリダンという下士官の情婦（オンリー）で、仙台のキャンプ・ファウラーの近くに間借りしていた。チェリダンは日本の金にして二万五千円ぐらい（注・一九五二年の水準、現在の二十万円ほど）の週給をとっていたので、その半分をルキにくれた。

彼女は毎日、昼すぎに起きて卵とバナナとコーヒーの食事（注・当時の最高級の食事）をし、それから昼寝をしたりデパートや映画にでかけたり、友達のところへお喋りにいったりした。男は晩の五時頃帰ってくるから、それからジープで街へ遊びにいくこともある。夕食はたいていレストランでたべ、酒は彼女の部屋でのんだ。二人とも媚薬や麻薬を使って、午前一時、二時頃まで快楽を貪った。ねむる前に軽い夜食をたべたが、この夜食代の一ヵ月分は、彼女が部屋を借りている家の五人家族の食費一ヵ月分よりも多かった。

そういうキャンプ・ファウラーのまわりの一般家庭では、ほとんど軒並みにオンリーに部屋を貸していた。それを目的に建てられたアパートもあった。このあたり一帯は大学生の下宿町として好適だったのだが、彼女たちによって部屋代がどんどんつりあげられたため、貧乏学生たちはさらに郊外の方へ駆逐された。ルキの隣りの家でも、ルキの友達のミ

ーティ（美知枝・二五・姓、出身地不詳）を入れるために学生を追いだした。学生を二人下宿させておくよりも、一人の洋娼に部屋を貸した方が十倍以上ももうかったからである。その学生はゆくところがなくていったん郷里へ帰ることになったが、その前にルキに会いに来て静かな態度でこんなことを言った。

「僕は材木運びをしたり、血を売ったりして今日まで勉強を続けてきましたけれど、これを機会に一応田舎へ帰ります。しかしそれは米軍の圧迫やドルの威力やあなたたちの破廉恥な生きかたに負けて逃げだしていくのじゃなく、田舎へ帰って農地の接収反対、米軍の演習地撤廃の運動に加わる方がより急務だと考えたからです。あなたは僕を、金も力もない哀れな奴だと思うかもしれませんが、僕にはあなたの方がよっぽどみじめに見えます。あなたは毎日そんなに遊ぶ時間があるんですから、それをすこしさいて自分のことをもう一度よく考えてみたらどうでしょうか」

これをきくとルキは怒りのために真紅になった。彼女はこんな「赤」よりも自分の方がいくらか正しい生き方をしていると思った。自分がこれまで経てきた苦しみ――友達はどんどん結婚していくのに自分だけがいつまでもキャンプで働いていなければならなかった苦しみ、自動車置場のトラックのなかで四人の米兵に強姦された苦しみ、そのままずるずるとたくさんの兵隊に関係しなければならなかった苦しみ、結婚の約束を何度となく裏切

られた苦しみ、異国の男の肉体からはなれられない苦しみ、そして物質的な豊かさで辛うじてまぎらされている劣等感などを、こんないやな学生に訴えたってわかりそうもなかった。彼女は鼻先でわらって言いかえした。

「だから日本の男ってきらいさ。こせこせして、みみっちくてしつこくって。今に日本の女はみんなアメリカへ行っちまうよ。講和条約だかができたからって、急にそう大きな顔しないでよ」彼女は無意識にシガレット・ケースを出し、米国煙草を取って銀のライターで火を点じた。それから学生の方へケースをつきだして「そら、のんでごらん、こんな煙草のんだことないだろ」と言った。学生はゆっくり一本とると、突然それを土間にたたきつけ、靴でふみにじった。彼女が何か叫ぼうとする前に、学生はさっさと外へ出ていった。

この事件のあった頃から、彼女たちを見る世間のひとびとの眼がいちだんと冷たく批判的になってきたことを彼女は感じた。チェリダンとジープで街をドライブしても、子供たちはもうチョコレートをねだったり、ハローハローと追いかけてきたりしないし、女たちの眼にも羨望のいろがうすれて、気のせいか憎悪や軽蔑がやどっているようにみえる。スプリングコートのポケットに、いつのまにか「反省しよう！　あなたは外国兵のおもちゃになっていていいのか？」「あなたのために日本の子供たちは蝕まれてゆく」などと書いたビラが入れてあったり、夜、兵隊や友達と一緒にふざけながら歩いていると、どこからと

もなく石を投げられたり、つばをはきかけられたりする。松島行きの国電の「軍専用」二等車が廃止されたので、ジープにのらない限り、兵隊や彼女たちも「一般の日本人」といっしょに三等車へつめこまれなければならない。いろんな特権が次々に失われてゆくような気がしてルキはあわてた。

「みんな講和条約なんてものができたからだ。だけど、今度こそ結婚して渡米できるだろう。ロバートやベンに比べたらチェリダンはもっと正直で親切だから」と彼女は考えた。そして幸運にもそれはいよいよ実現することになった。五二年の六月、彼女はチェリダンといっしょに横浜をたち、夢にまで見たアメリカへ渡った。夫？　の家はアーカンサスの田舎で農業をいとなんでいて、彼の両親は体格のいい許婚者といっしょに彼を待っていた。

「日本から働き者の女中をつれてきたよ」彼はそういって彼女を家族に紹介した。しかし彼女は皿洗いぐらいはやれたけれども、車やトラクターを動かすこともできず、また日本ではたいへん上手だと思っていた米語がほとんど役に立たなかった（チェリダンにいやらしい言葉ばかり教えられていたから、彼女が何かいうたびにみんなは怒ったり顔をしかめたりした）ので、三週間いただけで追いだされた。

彼女はこの事情を日本の自分のうち――いったんは捨てた自分のうちに手紙で打ち明けて、何とかかえりの旅費をととのえてくれるようにたのみ、そのあいだアトランタへでて

何かして働きます、と書いた。（アトランタにいる彼女の友人からの消息では）彼女は黒人相手の娼婦をやってやっと食いつないでいたという。彼女のうちは貧しいので、なかなか旅費を送ってやることができず、また彼女の両親は娘のことを近所にさんざん自慢していた手前、彼女が落ちぶれて帰ってくるのを喜ばず、近所のひとびともその噂をきいて実にみみっちい態度で彼女や彼女の両親を嘲笑しているのだった。（類似例多数）

3　永井たき子

永井たき子（二十・東京）の母は空襲で死に、父親は娘を理解しようとしなかった。彼女が男友達と散歩したり、天皇制を廃止すべきだといったり、うちのような商売（金融）は社会の害になるばかりだときめつけたりするたびに、父親は「うるさい、親に養ってもらってるくせに大きな口をきくな。貧乏な学生なんかと遊ぶひまがあったら、はやく川瀬（同業者）の息子のところへ嫁にいけ」などとどなった。彼女は自分で働いてたべるようにならなければ反抗も無意味だと思い、父親にかくれて北区のタイピスト養成所にはいり、五ヵ月後（五二年二月）所長の紹介でＹＥＤ（米軍横浜技術庁）の会計に就職し、同時に家出して女学校時代の友達である増田愛子（二十一・東京）のアパートへころがりこんだ。

愛子はキャンプ・ザマで働いていて、そのアパートは原町田にあった。
たき子は愛子の隣りの部屋を借りた。アパートの住人は女ばかりで、みんなキャンプ・ザマ、キャンプ・マクニーク、YED、アッギAFB、キャンプ・フチノベなどに勤めている。夜になるとどの部屋にも勤め先の米兵たちが遊びにきた。二階の窓から眺めてみると、そのアパートばかりでなく、あたり一帯が米兵と女たちとでいっぱいだった。
たき子は新しい土地に慣れるため、座間の方まで歩きまわってみたが、ひっきりなしにすれちがうジープや高級車や米軍トラックはみんな派手な化粧の女たちをのせていた。戦車の上で米兵にかかえられた女がげらげら笑っているのにも出逢った。彼女たちはみんな、歩いているたき子を軽蔑の眼のいろで眺めた。
本部でも、タイピストやウェイトレスたちは、ひとりのこらず米兵の情婦のようにふるまっていた。退庁時間がくると彼女たちは一人あるいは二三人ずつ、米兵の運転する車にのって、ふざけながら帰ってゆく。たき子はまだどの米兵とも親しくないのでひとりで帰らねばならぬ。彼女はゲートのそばで停められて、秘密文書を持ちだしたり何か盗んだりしていないか、男の労務者たちと同じように日本人のガードの手で服や体を検査された。米兵と車にのっている女たちは、スカートをまくりあげられた彼女の恰好を見て、「いいざまね！」「馬鹿の見本ね！」と嘲笑を浴せた。「何故あの人たちもゲートを通りぬけるとき

検査しないの？」と彼女は必死に抗議したが、ガードは一言も答えずカービン銃の台尻で彼女を突きとばした。
その翌日、彼女が淋しく働いていると、隣席のタイピストが話しかけてきた。
「昨日は大変だったわね。でもはじめての人は無理ないのよ。今日はあたしがワットンていう下士官に紹介してあげるから、そのひとと一緒に帰りなさい。」
彼女はその日ワットンと知りあい、彼のジープにのせてもらって何事もなくゲートを出た。昨日彼女をつきとばしたガードは、今日は卑屈に笑いながら「グッバイ、グウナイ」と二人のジープへ手をふった。
ワットンは彼女を横浜郊外のホテルに連れこみ、処女を奪い、煙草とキャンディをくれた。米兵の保護なしにYEDで働きつづけることがどんなにつらいかを考えると、彼女はワットンを拒めなかった。
それから彼はたびたび彼女のアパートに泊るようになり、彼女は彼の保護が失われるときにそなえて、ほかの米兵ともつきあうようになった。「あんたもやっと一人前になったね」と愛子は彼女をほめるのだった。
本部の仕事はきつく、地下の大きな部屋で彼女は毎日指の感覚がなくなるほどタイプをうたなければならなかったが、三月ほどたって、ある将校とのあいだに肉体関係ができて

から、命令で二階のいい部屋に移された。仕事もずつと楽になった。ここのタイピストたちは、情夫の階級に応じて優遇されたり酷使されたりしていることを彼女は知った。将校の情婦は下士官以下の情婦を軽蔑し、下士官の情婦は兵隊の情婦を軽蔑する。だから兵隊の情夫すら持たなかった彼女が、最初の日、全部の女から嘲笑されたのは当然のことだったのだ。

日本が独立して一週間目、ある女性新聞の記者が彼女たちのアパートをたずねてきて、たき子や愛子たち五六人から独立の感想や職場の実態などをきいた。あまりニュース・バリューがないように思われたのか、ほかの理由からか、この座談会の問答は新聞にはでなかった。

問「日本が独立したのを知ってますか？」

答　なし

問「ラジオはききますか？　新聞や雑誌は読んでいますか？」

答「FEN（米軍向け放送）ならきいている。ジャズがいちばん面白い。日本の新聞は読んでいない。雑誌はライフとスタイルブック。」

問「勤めはたのしいか？　何か圧迫や辛いことはないか？」

答　なし

問「米兵をどう思うか？」

答「経済的にも安定しているし、親切だし戦争も強いし魅力的なところが多い。」

問「基地の日本人労務者が米軍の意向次第で簡単に首を切られたり、そのほか人権を充分保護されていないというがどうか？」

答「私たちはそのことに関係ない。」

問「おなじ日本人としてどう思うか？」

しかしこれにも答えはなかった。（類似例十三）

4　リッティ

リッティ（十九・秋田県・姓名不詳）は十六のとき三沢のバーNに売られ、十七のとき横浜の大売春業者Tの経営する相模原のハウスに移された。五二年の夏、相模原の米軍の一部が演習のために富士山の東麓へ出動したので、リッティとその仲間たちもTの命令にしたがって御殿場へゆき、ビヤホールの女給を兼務しながら肉体を売った。

リッティにとって、洋娼の生活は快適だった。もう朝四時におきて草刈りをしなくてもいいし、泥田につかって晩の十一時まで働く必要もない。稼ぎ高の六割は「部屋代」としてビヤホールの主人（Tの子分・彼は「部屋代」の半分をTに送った）へおさめなければ

ならなかったけれど、それでも週に七千円は自分の金が入り、服や靴やハンドバッグを買うことができた。相模原にいたときとちがって、御殿場では逃げようと思えばいつでも逃げられたのだが足をあらう気は全然なかった。彼女ばかりでなく、彼女の仲間たちも洋娼になる前の生活の方がよかったと考えている者はひとりとしてなかった。

ただ、だいぶ前からリッティは慢性の淋病に犯されていた。それで御殿場へ来てから主人の命令で検診と治療を受けた。「商売道具はいつもきれいにしておかなきゃいけねえからな、それが文化的なサービスというもんだ。」と主人はいつもリッティたちに言った。しかしせっかく週一回検診してもらっても、毎日四人も五人もの米兵と激しい性交渉をくりかえすのでは、治療の効果はあがらなかった。まもなく梅毒の症状もあらわれてきたので、彼女は苦しくなり、二ヵ月ほど勤めを休んで治療したいと主人にたのみこんだ。

検診所通いを奨励する主人だから簡単に許してもらえるだろうと思っていたのに、主人の返事は意外であった。

「二ヵ月も休む？　冗談いっちゃ困るぜ。部屋代五ヵ月分を前払いするんなら話は別だがな。それがいやならさっさと田舎へかえってくれ。代りはいくらでもあるんだから。」彼女はがっかりしてしまった。しかし遊びにくる兵隊の方では、彼女が「検診済」の札を示すと、安心して膿のでる彼女の体を抱くのだった。

病気はだんだんひどくなってきた。五二年の秋には兵隊のあいだでも「ぼろ」というあだ名でよばれるようになってしまった。物好きな兵隊といっしょに麻薬をうち、口をつかってかせぐような日が続いたが、それもできなくなったので主人はとうとう彼女を追いだした。

服を売ったり友達にかりたりした金で、ともかく応急処置だけを済ますと、彼女は大業者の支配のもとにない小さなバーに住みこんで体をごまかしながら働いた。「どんなことがあっても二度と田舎へ帰るのはいやだ。今は苦しくとも、こうして働いていればいつかはアメリカへゆけるかもしれない。それに前の主人は働けば働くほど病気は軽くなるといっていたが、それもほんとうかもしれない。」しかし、やがてそのバーからも追いだされた。彼女は昼間だけ知りあいのオンリーの家に泊めてもらい、夜は戸外で体を売りつづけた。

しばらくたって業者たちは玉穂村に大きな慰安センターを作った。これは富士山麓全体を売春都市化する彼等の計画の第一着手ともいうべきもので、T、U、Mなど名のしられた売春業者やその副業であるK建設、R産業などの闇会社や、売春事業の将来を期待するH銀行・T銀行などから、およそ五千万円の資本が投入された。

ダブル・ベッド、洗浄所、スチームつきの九十五の部屋にそれぞれ専属の洋娼たちが配置され、性病治療室や美容室まで完備している。米兵はこの慰安センターに殺到し、した

がって慰安センター用として登録してもらえなかった洋娼たちはあぶれた。
リッティはもう廃人同様だった。彼女はなんとかして慰安センターにやとってもらいたくて、知っている業者のところへ毎日たのみにいったが、そのたびに追いかえされた。「てめえみてえなばばあは、そのへんの野良犬とでもやったらいいだろう。」しまいにはそんなことまで言われた。彼女は最後に残った靴を売って故郷へ帰り、その年の冬、沼に身を投げて死んだ。（類似例多数）

5　加茂きぬ子

加茂きぬ子（十八・神戸）の小さな家は、金持ばかり住んでいる街の真ん中に恥ずかしそうに建っていた。正直一方の父は下っ端の公務員で、一万五千円ほどの月給をもらっていたが、きぬ子を頭に子供が四人もいるので、食べることだけはどうやら困らなかったにせよ、みんなに新しい服を買ったり靴を買ったりする余裕はとてもなかった。
きぬ子は五二年の春高校をでると、すぐN銀行の就職試験を受けたが、学科も体も申し分なかったのに、面接のとき古い服を着ていたのと、「自由党は金持の味方ばかりするからいやです」と答えたのとで不合格になった。それから毎日、彼女は家の窓から近所の家の

お嬢さんがハイヤーにのって買物から帰ってきたり、流行のドレスを着てどこかの坊ちゃんといっしょに音楽会へでかけていったりするのを、じっとみつめていた。
彼女はいちどでいいから、そのお嬢さんたちのように流行の服を着たりハイヤーにのったりダイヤの指輪をはめたりしてみたいと思った。彼女は殺してやりたいほどそんなお嬢さんたちが憎かった。
それからも二三度就職試験を受けたが、やはり縁故関係がなかったり、然るべき人に持ってゆく袖の下がなかったりしたためにいつもだめだった。もう冬がくるというのに、彼女は秋のコートも冬の外套も買えず、いらいらした不幸な気持になっていた。
そんなある日、キャンプ・カーバーでメイドの募集があるときいて彼女は化粧をしてでかけていった。試験官は美青年のアメリカ士官と二世の派手な服装の日本人だったが、ここでも自由党を支持しないといったためにだめらしかった。しかし急に悲しくなった彼女が泣きながらたのみこんでみると、二世がくわしくききたいから私のところへ来いといい、違う部屋へ入れられていろいろ事情をきかれた。
二世は大変同情した様子で、私がきっと何とかしてあげよう、私はあなたを見たときから特別好意をもっていた。だからあなたも私の親切にこたえてほしい、といきなり接吻された。彼女はほんの少し抵抗したのち、彼に処女をささげた。

すると正式な採用通知が、五三年にはいってキャンプからきた。兵隊のクラブのメイドになると同時に、処女をささげた二世との交情も復活した。彼女は彼にねだって外套を買ってもらい、長いあいだのひがみがすこし消えたように思った。二世が米国へ帰るとき、彼女の肉体は彼の友達の若い下士官にひきつがれた。

ほかにも、暴力によって、あるいは愛の言葉で、あるいはドレスを買う約束で、何人かの兵隊が彼女と関係を結んだ。しかし彼女がいちばん好きだったのは、やっぱりそのジェフという若い下士官だった。彼女は昼間はメイドの仕事をやり、夕方から彼のジープにのせてもらって、映画をみにいったり、うまいものをたべにいったりした。真紅なパジャマと、ハイヒールと、真珠のネックレスを、彼は買ってくれた。彼女はキャンプちかくのホテルにたのんでそのパジャマをあずかってもらい、三日にいちどはきっと二人でそこへいった。ホテルにゆかない日はキャンプの彼の個室か、彼女の友達の下宿かが二人の情交の場所になった。彼に抱かれるとき、彼女は「アイ・ラブ・ユウ」という言葉だけを何度となくくりかえした。たとえほかに言いたいことがあっても、それを米語でどういいあらわせばいいのか、彼女は知らなかった。

半年のあいだ、彼女なりに幸福だった。ある日の抱擁のとき、ジェフがたったいちど「キヌコ、結婚しようね」とささやいたことを、彼女は忘れずにいた。

六月の八日、彼女が出勤してみると、クラブのなかは大騒ぎだった。兵隊たちはわらいながら乾杯したり、メイドを抱いておどったりしている。おどろいた彼女のそばに、やはりある下士官のオンリーになっているメイドが真蒼の顔をしてちかづいてくると、泣きだしそうな声で言った。「朝鮮で戦争が終るかもしれないんだって。そしたら、このキャンプはぜんぶアメリカへかえるかもしれないって。何とか協定が結ばれたっていう話よ。」きぬ子はジェフの部屋へとんでいった。しかし彼は浮かれてどこかへでていったあとらしく、机の上に彼と彼の妻と子供らしいひとたちの写真が、彼女がいちどもみたことのない写真が投げだされてあった。彼女はわっと泣きだすとさっきの友達のメイドのところへ走っていった。二人は騒いでいる兵隊たちを避けて、食堂の隅で抱きあって泣いた。「ああ、戦争がつづけばいい。戦争がいつまでもつづけばいい。ジェフがかえるなんていやだ」きぬ子は泣きながら大声で言った。(類似例三十)

6　トウキョウ・セブン・ローズィズ

トウキョウ・セブン・ローズィズは、七人の非常に美しい日本女性によってつくられているグループである。おそらく美しさの程度によってなのだろうと思うが、「第一の薔薇」

「第二の薔薇」「第三の薔薇」……等々とよばれているだけなので、本名はまったくわからない。「第五の薔薇」がもとケイ・玉木といって、キャバレーDのダンサーだったということを調べてくれた新聞記者がいるが、これも本当かどうかはわからない。しかし、本当かどうかわからないながら、彼女たちの前歴といわれているところを一応あげておくのも、前提として無駄ではあるまい。

「第一の薔薇（ファースト ローズ）」。二十七、八歳ぐらい。かけだしの女優など足もとにもよれないほどきれいである。身長一六五センチぐらいで、どっちかというと肥っている。英・独・仏語はぺらぺら、ハルピンでうまれ、二十歳ぐらいのとき（つまり終戦の前後）シンガポールにいた？　あるいは上海にいた？　……ともかく戦後引き揚げてきてGHQに勤めたが、そこで高級士官たちに犯された。……しばらくH中佐の情婦になっていて、彼が帰国するとともにS大将の情婦になった。彼の帰国ののちT中佐の情婦になって横浜の接収住宅に同棲していたが、彼は朝鮮戦争がはじまった直後、南朝鮮で死んだ。……すでにS大将の情婦時代、彼が軍用機を利用して麻薬その他を香港や京城から運び、私腹をこやしていたのに加担した疑いがある。またT中佐が将校用のサービス女性を朝鮮戦線へ大量に送りこもうとしたとき、彼女が北九州基地の司令官や売春業者T、Wなどと交渉したものらしい。現

在、彼女に特定の情夫はない。……

「第二の薔薇（セカンド ローズ）」。二十七、八歳ぐらい。小がらで少女のようである。K・Y子という女優とよくまちがえられるほど似ている。経歴その他いっさい不明。

「第三の薔薇（サード ローズ）」。ついに見る機会なし。いっさい不明。

「第四の薔薇（フォース ローズ）」。これも全然わからない。

「第五の薔薇（フィフス ローズ）」。本名玉木けい子？（ケイ・玉木）。……（もし玉木けい子だとすれば）きつすいの東京っ子で、戦災で家族を失い、敗戦後キャバレーDに勤めているうち、どんどん売出してナンバー・ワンになり、一九四八年度にはプロ・ミス・関東に選出された。評判を伝えきいた渉外局関係のR大佐が東京の将校クラブへ彼女を譲るよう、Dへ申しいれ、四八年の終りごろ将校クラブへ移った。……R大佐の個室にひっぱりこまれて暴行を受け、強制的に彼の情婦にされた。……その後彼のスペシャル・メイドとして軽井沢に四ヵ月ばかりいた。……彼の帰国のあと、クラブの将校たちと適当につきあう。このころからもと

Dにいたときの情夫、通産省の某高官と関係が復活、したがって通産省とGHQづきの高級将校とのあいだは彼女によって固くむすびつけられた。南京虫（洋娼たちが特に好む金の小さな腕時計）をSPSを通じて闇に流すときには、SPSを監督する将校・日本官僚・SPS業者・日本業者間の連絡を彼女がやった。……銀座某キャバレーでおこなわれた、そしていまもおこなわれつつある国際的大賭博パーティには、ほとんど欠かさずにやってくる……。一六三センチぐらい、すばらしい肉体美。

「第六の薔薇（シックスス ローズ）」。一六三、四センチ、髪を金いろに染めている。ちょっとみただけでは白人女性と区別がつかない。（混血だとの噂もある。）FENから、一九五〇年に二回、小説かなにかの朗読を放送した。……情報課のP中佐の情婦だったころ、やはり軽井沢にいたことがある。（四九年の夏？）その他の経歴はわからない。

「第七の薔薇（セブンズ ローズ）」。身長容貌など確かでない。電源開発のための外資導入に関係して、アメリカン・バンクおよび世界銀行から二人の黒幕的人物がやってきたとき、「第二の薔薇」とともにホテルTに泊りこんでサービスした。以前、麻布のアメリカン・クラブに勤めていたことがある。

……各種の情報を綜合してみると、現在この七つの薔薇は何か途方もないことをやらかしているようである。……たとえば内灘（＝北陸の米軍演習地）の接収反対運動が絶頂に達していた五三年の六月三日、極東軍司令部のM・G両少佐、米大使館のM書記官、外務省・通産省・保安庁の高官十人ほど、I重工業・S重工業・A化成など軍需工業会社の部長クラス同じく十人ほどが銀座某ナイトクラブに集まって、早急に接収を強行するための対策を協議したとき、彼女たちは七人ともその席につらなっていた。会談が終ったあと、M少佐は「第一の薔薇」を、G少佐は「第二の薔薇」を、M書記官は「第三の薔薇」を、通産省の某課長は「第四の薔薇」を、保安庁の某幕僚は「第五の薔薇」を、同じく某幕僚は「第六の薔薇」を、外務省の某次長は「第七の薔薇」を、それぞれ抱いてクラブにつづくホテルの方へ消えた。接待役だったためか、軍需会社の連中は女を抱かないでかえっていった。……そして何日もたたないうちに、内灘には接収強行を告げる最初の砲声がとどろきわたったのだった。

……また、MSA（米軍からの兵器供与）を受けるについては、周知のごとく本交渉のほかに複雑きわまりない舞台裏のかけひきがおこなわれているのだが、なかでも最も重要だったと伝えられている新宿のクラブLでの会談——極東軍司令部・米大使館・日本政府側（保安庁を含む）・軍需会社側それぞれ三人ずつが出席した——のときにも、七つの薔薇

はそろって顔を見せている。この場合も前と同様、軍需会社側を除いたひとびとが薔薇たちを車に乗せてどこかへしけこんでいったのだ。（もっともそれでは男が二人あまった勘定になるが、米人が二組、二人で一人の薔薇を連れていったのである。）そして三日ののち、日本政府はそれまでの口をぬぐって、「今度受ける援助は軍事援助であるが、自衛のための軍事援助だから違憲ではない」と発表している。

つまり日本が米国に切り売りされていくときには、必ず七人の薔薇が姿をあらわす。まるで手際よく切り売りをやった日米双方の関係者を慰安するかのように、どこからともなくあらわれてくるのである。彼女たちが姿を見せさえすれば、てきめんに演習地が接収されたり軍需会社の思うようにことがはこんだり戦争の準備がそれだけはやくなったりするのだから、米軍や軍需会社の高いポストにある人間たちは、七人の薔薇を抱きたいためにかけひきに努めているのではないか、と疑われてくるほどである。

実はこの調査はまだまとまっていないし、編者個人の問題としてもかなり危険なことなので、さしひかえるつもりだったが、よく考えてみると、この七人の女たちこそ真に「洋娼」とよばれるべき者たちであり、また日本の女性の肉体が——もっとも美しい種類の肉体が何のために役立てられているかという問題を、象徴する意味さえ持っているのではなかろうかと思ったために、あえて報告するわけなのである。七人の薔薇たちほどはっきり

したかたちでなくとも、彼女たちと同じような役割を（多くは意識せずに）果している女性はいないであろうか。暴行事件をとりあげることももちろん大切であるが、わたしたちは日本の女性の肉体がこんなふうなかたちで用いられているという事実をも見逃してはならないのではなかろうか。（類似例不明）

第二章

慢性的売春恐慌・オンリー形態とその崩壊・「新国軍」登場す・洋娼時代の終り

五二年四月、日米講和条約が発効したとき、日本にいる米兵と洋娼の数の差は非常に少なかった。しかもこれらのアメリカ兵も、毎日毎日女をほしがったわけではなかった。五二年中に調べた五百人の洋娼の言うところを平均すれば、この時期、彼女たちの大部分は四日にいちどずつオールナイトの客を、また二日にいちどずつショートタイムの客をとっているだけで、生活はひどく苦しかった。

なぜなら、これだけの客しかこないとすれば、一月の収入は最低八千円――平均一万一千円――最高一万九千円どまりとなり、そのうちから搾取あるいは寄生者に最低四千五百円――平均七千六百円――最高二万三千円を払うと、手もとには最高四千円――平均三千四百円――最低マイナス四千円が残るだけで、この残金のうちから、配給通帳なしの闇米を買い、化粧品代・服装費・衛生費などをしぼりださねばならなかったからである。

こうした状態は、前にもふれたように、朝鮮戦争がおこった直後の不景気ほどではなかったにしろ、ほとんど第二次売春恐慌の前兆、あるいは慢性的な売春恐慌そのものであったかもしれない。しかも今度は、第一次恐慌のときのように、戦争が大きく拡大し、大量の米軍がやってくるような見込みはまったくなかった。国際的な平和勢力の前進に呼応するごとく、朝鮮にも平和の訪れが予感され、板門店の休戦会談は、何度となく失敗しそうになりながらも、ねばりづよくつづけられていたからである。そんな空気を反映したのか、朝鮮や日本にいる米軍の数も、ふえるどころか少しずつ減っていきつつあった。

にも拘らず、洋娼たちの方は、減ることができなかった。洋娼をやめて、またはやめないままで、もとの職業や違う職業につきたいと思っても、空いている職場はどこにもなかった。バーやキャバレーには女があふれており、農漁村の過剰人口はますます多く、オフィスや工場では大規模な首切りがはじまっていた。前の章の新井照子の例のように、勇気

をもってみずから洋娼になることを拒否した女性もないわけではなかったが、これらはその家庭が当分娘をあそばせておいても何ともないような経済力をもっていた場合にのみ可能とされたのである。

もっとも、この時期に奈良のRRセンターが出現し、また警察予備隊がかねての計画どおり保安隊と名をかえて増強されたことは、彼女たちにとってある程度の救いにはなった。センターと保安隊基地の売春街は、あわせて二万五千人乃至三万人の娼婦を養うことができたからである。――RRセンターは行政協定によって、つまり米日両国政府の約束によって設置された公然たる肉体市場で、その内部と周辺に四千人ちかくの洋娼を殺到させたし、各地の保安隊基地（その七割が米軍基地と同じ場所かすぐちかくの場所にある）は洋娼と和娼をいっしょに吸収した。しかし、これをもっと突込んで観察してみれば、RRセンターや保安隊基地の売春組織は、ひとつは非常に大規模であり、ひとつは旧日本軍用のそれに似た和娼窟の延長だったために、いいかえるならいずれも大業者の支配する売春組織だったために、大業者の支配下にある洋娼のあぶれを救うには役立ったけれど、それ以外の洋娼たち、即ち中小業者や寄生者と結びついていた洋娼たちを吸収することはできなかった、ということがはっきりしている。RRセンターや保安隊基地に集った洋娼たちの七十％が、朝鮮戦争ぼっぱつ前に既に転落していたこと（つまり大業者支配の下に残存し

ていたこと)、またその転落動機の約八十%が「生活苦から」であったことは、以上のことを裏から証明している。

大業者の側からいえば、自分たちの勢力——とかく中小業者に侵蝕され勝ちだった地盤と勢力を拡張するときがやってきたわけである。洋娼たちの側からいえば、「生活苦から」転落し、大業者に支配されているグループと、「虚栄心」から転落し、中小業者・寄生者と結びついているグループとが、さらにはっきり分れたということである。転落動機とは反対に、前者はいま自分たちの肉体を売るあたらしい市場をみつけだし、後者はジリ貧の「生活苦」に追いこまれつつあった。

かくて、中小業者・寄生者と結びついている洋娼たち——全洋娼数の六十%——は、遠からずおそいかかってくるであろう売春恐慌の脅威に、何とかしてうち勝たねばならなくなった。

洋娼をやめないで、虚栄心を傷つけないで、収入を多くする方法——恐慌にうち勝つためのそんなうまい方法が、たったひとつだけあった。彼女たちが意識してその方法をえらんだのかどうかは知らない。しかしたとえ意識してえらばなかったにせよ、事態はどうしても彼女たちがその方法をえらばなければならないような方向にすすんでゆきつつあった。そして五二年の秋には、すでに彼女たちの八十%がその方法の実行者になっていた。

オンリーになること、つまり特定のアメリカ兵の一人きりの情婦になることが、その方法だったのである。一時間ごとあるいは一晩ごとに肉体の切り売りをするのではなく、半月なり一月なり三ヵ月なり(半年以上続く例は全体の十五%にすぎぬ)、ひとりのアメリカ兵に専属し、たがいに相手を独占するようなかたちをとる。そのかわり彼はその期間じゅうの彼女の生活費いっさいを負担しなければならぬ。いいかげん飽きたところで、たがいに次の相手をえらぶわけである。はじめから納得ずくの話だから、こんな場合にあり勝ちのトラブルは決して多くない。

もちろん、これまでだってオンリーはいた。四七、八年ごろには、その数はかなり多かった。しかしそのころのオンリーと、この時期からあとのオンリーとは性質がだいぶちがっている。前のオンリーは大部分がスペシャル・メイドのかたちをとり、相手の士官や下士官が帰国するとともに、ずるずると不特定の相手に体を売る街娼に落ちてゆき、ついには大業者や暴力団の支配下にくみ入れられ、RRセンターなどの大業者経営の売春施設に吸収されてゆく経過をたどったのに対して、この時期からあとのオンリーは、最初は中小業者・寄生者とむすびついて不特定の相手と交わっていたものが、特定の相手に専属するようになってゆくわけで、まったく逆の経過をたどっている。だがスペシャル・メイドにせよこの時期のオンリーにせよ、米軍キャンプを基盤にして生れてくるものが多かったと

いう点では共通している。

そして彼女たちが恐慌の脅威にさらされたのは、何よりも一晩三人も四人もの相手に肉体を切り売りしなければならぬ売春のかたち――いわゆるバタフライ形態をとっていたためだったのだから、それがオンリー形態にきりかえられたいま、脅威は一応くいとめられた。RRセンターや保安隊基地の設置と相まって、このことは洋娼たちの経済力を、全般的に、そして一時的に、たちなおらせた。各基地周辺に出張している銀行の支店では、彼女たちの預金額がふえるのをみてよろこんだ。

しかし、もういちどふりかえって考えてみると、彼女たちがバタフライ形態からオンリー形態にうつっていったということは、ただ経済的な理由からばかりではなかったようである。オンリーにならなければ――正式の結婚に似た方法をとることによって、「あたしは娼婦ではない！」と自らにいいきかせなければ、彼女たちは独立後急激にもりあがってきた彼女たちにたいする国民の非難にこたえることができなかったのではなかろうか。オンリーへの移行が、独立後、突然凄じいいきおいでおこなわれたことを思いあわせると、こうした心理的な要因は、わたしたちの考えるよりずっとつよく、彼女たちの心を支配していたのではなかったか。

けれども、オンリー形態への転換によって彼女たちが息をふきかえしたのも、ほんのしばらくのあいだだけであった。朝鮮の休戦が確定するとともに、在日米軍はさらに減少の道をたどりはじめたからである。現在（五三年十月）在日米軍の総数はすでにぐっと減っているとみていい。これにたいして洋娼の数は約七万三千人、オンリー形態を維持するための絶対的な条件すら、次第に満たされなくなりつつある。事実、洋娼数が兵力を上まわった基地では、はやくもオンリー形態の崩壊がはじまっている。最初彼女たちは、米軍の少くなった基地から米軍が比較的残っている基地へ移動していったが、その移動も九月いっぱいぐらいで終り、現在では情夫の帰国によってオンリー形態のそとへはじきだされた洋娼たちが、日本人向きの街娼や赤線区域の集娼として再編成されてゆく過程がはじまっているように思われる。

だが、今度こそ彼女たちはいくところがないのだ。日本人向きの赤線区域や街娼地帯もあぶれた洋娼全部を必要とはしていない。必要としていないどころか、いままでだって女があまって困っていたほどなのだ。七万五千の洋娼のうち、一般の赤線区域に吸収されるのはせいぜい一万人乃至二万人ぐらいのものであろう。

そこで彼女たちの前にさっそうと（？）登場してくる男たちが何者であるか、もう説明の必要はあるまい。米軍がいなくなってガランとしたキャンプへ、「新国軍」がはいってくる。それと同時に彼女たちはたちまち「新国軍」用の娼婦としてきりかえられる（ことに

なっている)。「新国軍」が二十万人から三十万人に増員されるのと平行して、売春業者たちは彼女たちの数を二倍にふやし、全国で百二十ヵ所の「新国軍」用慰安センターを作りあげる案を計画ちゅう――いや、すでに建設準備ちゅうである。やがてできあがるであろう「新国軍」用慰安センターは、RRセンターを模範としてつくられるであろう。それはかつての帝国軍隊用慰安所の長所とRRセンターの長所とを組みあわせたようなものになるであろう。前者の長所は慰安所内を無法地帯化することによって業者に無限大の搾取と残虐を許したことであり、後者の長所は肉体という商品の回転を可能なかぎりはやくしてアメリカ的即ち文化的に搾取の能率が高められていることである。したがって「新国軍」用慰安センターはもっぱら大業者の手によって建設されることになるであろう。朝鮮戦争のぼっぱつ後からはじまった大業者対中小業者の勢力あらそいは、ついに大業者の勝になったのだ。もっとも、腐敗政治家又は官僚と直接むすびついている資本力のつよい大業者が、数は多くてもどこかに洋娼への寄生的性格をもっていた資本力のよわい中小業者を圧倒したのは当然のことであった。結局中小売春業者の展開は長期戦化にともなう売春ブームの波に乗ってあらわれた一時的な現象にすぎなかったのだ。ただし、大業者の勝利の結果は、いままでのところ、中小業者を駆逐するのではなくかえってそれを自己の勢力の内部に吸収するというかたちであらわれている。なぜならこの方が洋娼をより一人のこらず

把握できるし、またRRセンター的な長所をいながらにしてつくりあげることができるからである。この百二十ヵ所の慰安センターの設置は、もちろん、保安庁公認である!

かくて、いま、洋娼の時代の幕はおりようとしている。敗戦直後から現在まで、洋娼として動員された日本女性の数はおよそ百万をこえるであろう。(そのうち十五万人は確実に米兵その他の外国兵の暴行を受けて転落している。)彼女たちはつねに米兵の残虐と業者の搾取と性病の不安に脅かされてきた。同時に彼女たちは日本の社会を腐敗させ、経済を混乱させ、道徳を頽廃にみちびき、また基地周辺の市街や農村や漁村を経済的・道徳的に完全に崩壊させた。つまり、彼女たちは犠牲者であるとともに他をも犠牲にした――被害者であると同時に加害者だった。われわれはこの犠牲者たちとともに、彼女たちを辱しめ、彼女たちを堕落させ、彼女たちを搾取した人間たちのことを、永久に忘れないだろう。しかし、同時にわれわれは、彼女たちによってアメリカの軍事基地日本の矛盾がいっそう激化し、道徳がマヒし、社会が破壊され、子供たちが堕落していったことを、いつか彼女たちが忘れさったあとでも、きっとおぼえていることだろう。

第七部　グラフは何を物語るか

最後に、これまで述べてきたことを、いくつかのグラフによって要約し、補足してみよう。グラフ（1）は、主として各地の新聞社・保健所・警察・売春業者などが持っている資料によって書いたが、米軍・国連軍の数は新聞発表や私の見聞をもとにした推定によるほかなかった。グラフ（2）以下は、一九四九年と五三年、全国各基地周辺からえらびだした五百人の洋娼にたいする直接面接・または彼女たちが自分で書きいれた質問書へのこたえにもとづいて書いた。この場合、四九年の五百人と五二年の五百人とは、もちろんぜんぶ別の女性である。

彼女たちをえらびだすにあたっては、でたらめを避け、できるだけ正確なサンプリングになるよう心掛けた。しかし洋娼全体の名簿や住所表などが到底作られるものでない以上、ふつうの世論調査などにくらべて誤差が大きいであろうことはいたしかたない。なにぶん、わたしと協力者たちの小さな力では、大きな異常な社会的勢力である洋娼群の実態を、あ

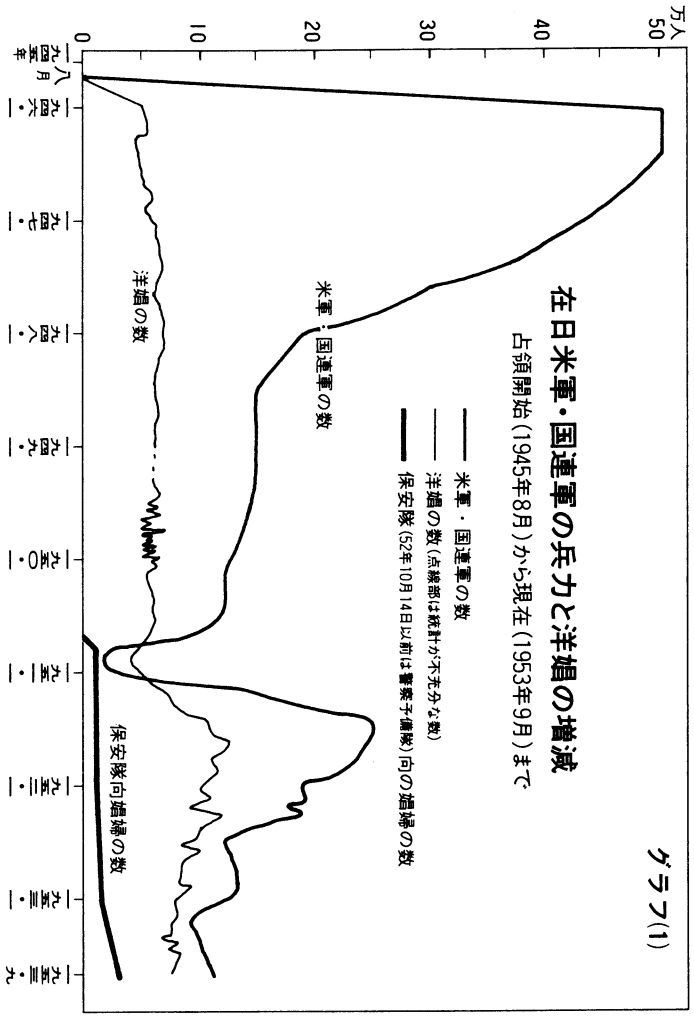
ますところなく統計にとらえることは不可能であった。ことにMPや警察・売春業者たちの脅迫的な妨害が、この仕事の困難をいっそうはなはだしいものにした。

はじめの計画では調査の対象を少くとも五千人とし、またアンケートによって多数のアメリカ兵の意見もきいてみる予定だったのに、それもとうとうできなかった。しかしわたしたちとしては、いままでとかく地域的に孤立しておこなわれていたこの種の調査を、全国的・全国民的な視点から決定的に総合するために、できるかぎりの努力をこころみたつもりである。

では最初にグラフ（1）を見ていただきたい。一番上の線が米軍（および国連軍）の数、その下にあるのが洋娼の数である。また最後の方に低くでてくるのは警察予備隊——保安隊——自衛軍——新国軍用の娼婦の数を示している。

彼女たちは米軍の日本占領の直後に突然発生し、わずか三ヵ月のあいだに五万人に達した。戦災や暴行を受けた娘たちを狩り集めて慰安所へ送りこんだ、日本政府・警察・勧業銀行・売春業者そして暴力団の、許しがたい犯罪の痕跡が、急激に上昇するこの部分の線となってはっきり残っている。

その数は四六年の二月までほぼ五万人におさえられたまま進んでゆく。つまり五十万の



米軍に対して十分の一の洋娼がいたわけであった。したがってこの時期は米軍の性的需要にたいして洋娼の供給が不充分だったため（もちろんこれはりくつの上での理由で、実際には米軍の個々の兵隊の残虐性が原因となるのだが）、暴行事件がもっとも多かった時期でもあった。四六年の三月、慰安所がオフ・リミッツになるとともに、慰安婦は街娼として街へ投げだされたが、このとき彼女たちの数は若干減少した。

しばらくして米軍の数は（占領初期の混乱がおさまったため）、ぐんぐん少くなってゆく。にも拘らず、洋娼の数は反対に上へ昇りはじめる。住む家も食べものもない戦災娘や未亡人たちが街娼の仲間に加わりはじめたからもあるが、何よりも占領初期にスペシャル・メイドとして囲われたムスメたちが、主人の士官や下士官が帰国したのちも、「文化生活」と異国の男の肉体を忘れられないで転落していったからである。またこうした街娼の増加の前提として不完全街娼形態――搾取なく組織なき個人売春のかたちが存在していたことも、さきに述べたとおりである。四六年の十一月にはMPによる狩りこみのためにのべ七千人ほどがVD病院（つまり性病治療所兼留置場だ）へぶちこまれた。しかしその後も、米軍が減少するのと鮮やかなコントラストを示してスペシャル・メイド転落者が増加してゆくから、四七年には洋娼数はほとんど七万人を突破しそうになっている。

そして四八年から四九年、洋娼は六万人～六万五千人の線を守って米軍の線と平行する。

新しく転落する女性の数は前よりも少くなるが、いちど転落した者はなかなかやめない。つまり完全街娼形態が不完全街娼形態を圧倒しはじめ、肉体の需給関係は米軍二・五に対して洋娼一の割合で均衡に達する。この割合は完全街娼形態のもとでのみ妥当するものであって、たとえばオンリー形態のもとでは妥当しないことはすでに前に述べた。

この時期から発生しはじめた、あるいは発生を余儀なくされたアルバイト洋娼の数はこの線のなかに含まれていないから、このグラフだけみるといかにも安定した均衡のように思われるが、実は極限的な、ぎりぎりの均衡だったのである。時間がたてばたつほど、洋娼の発生基盤は拡大・深化してゆき、完全街娼形態の内部に危機と矛盾をもりあげてゆく。性病のまんえんもそうした危機要因のひとつである。残虐な取締り時期が来て、洋娼線は地震のような激しい変動を開始する。谷は洋娼が全国的にVD病院にぶちこまれたことを示し、山は性病が全快又は軽快してふたたび商品が市場に出ていったこと――病院から釈放されたことを示す。人権じゅうりん的狩りこみと検診のくりかえし。この時期には何の理由からか米軍も活発に動いて、日本から外へ出て行ったり、また日本へかえってきたりしていたらしい。

しかも各地域の調査を見てみると、この時期の取締りは、たとえば名古屋付近の例によれば、そこの米軍部隊が移動したあとで名古屋付近の街娼の狩りこみをやり、部隊がふた

たび日本へかえってくるちょっと前に彼女たちをVD病院から釈放するといったような、非常に親切な方法でおこなわれたらしい。取締りの時期がすぎると、米軍の動きも平静にもどった。この時期を通じて街娼グループと暴力団――大業者・ボスとは密接に結びつくことになる。

六〇年六月、朝鮮戦争のぼっぱつと同時に、在日米軍はほとんど朝鮮へ出動し、それとともに洋娼の数も低下しはじめるが、米軍にくらべて減り方がずっとゆるやかであるために、五万人位の点で両線はついに交叉し、それからは洋娼の数の方が米軍よりも多くなってしまう。――深刻な売春恐慌の襲来。洋娼たちはことごとく戦闘基地へ集中してゆく。ジェットの爆音のもとの「戦争逐行のための売春」!

やがて零号作戦の挫折と長期戦の準備のために、米軍は続々と日本へかえってきはじめる。一方、「自由世界」からの増援軍も到着しはじめたので、米軍の線はふたたび急激に上昇する。その数の上昇角度は四五年に占領軍がはじめて上陸してきたときの角度とほとんど同じである。グラフの上では「第二の占領初期」とでもよべそうなかたちを示すが、暴行その他の残虐さも占領初期にわをかけたものであったことは、幾つかの実例が物語っているとおりである。五一年半ばを頂点として米軍の線は上昇をやめたが、これに反して、この時期の洋娼線の上昇のかたちは、占領初期のそれとはまったく異ったものである。

実をいうと、このグラフの最大の謎はここにある。占領初期には米軍数が急激に増加したにも拘らず、洋娼数は五万台でとまっている。ところが五一年には洋娼数はきわめて不可解な増大をあらわしている。米軍の増加は占領初期の二分の一に辛うじて達するぐらいなのに、洋娼の方は占領初期の二倍半にまでふえている。――これはやはり、日本全土の完全軍事基地化・洋娼が発生する基盤の拡大などもさることながら、一部の日本女性の精神的・道徳的堕落を考えにいれなければ説明は不可能であろう。アメリカ式のいい生活さえできれば、その基盤が国外での戦争であっても愛人暮らしであってもかまわない。この考えがこの時期、日本の男にも女にも深くひろがっていったのであろう。それに、街娼の戦闘基地への集中にともない、完全街娼形態が崩壊したことも、重要な原因のひとつであった。

しかし五一年の半ばから、在日米軍数はふたたび下降しはじめる。洋娼の方はそれから一月あまり遅れて十二万七千人の頂点に達し、その後もしばらく十万人～十二万人の線を守って動かない。米軍の増大は、完全街娼形態のような拘束さえ加えられなければ、そのまま洋娼数の増大をひきおこすが、両者は平行しておこるのではなく、洋娼の方がすこしずれて増大してゆく、という法則のようなものをここからみつけだすことができる。

米軍が減少する場合も同様で、洋娼のほうが少しずつ遅れて減る。だから五二年の五月

には、減少する米軍線と減少しない洋娼線との差は二万人位になり、第二次売春恐慌の時代がはじまったというわけである。

バタフライ形態からオンリー形態への移行が起こるのはこのあとだ。バタフライ形態のままだったら当然恐慌によって崩壊しなければならない筈の洋娼線が、米軍線のすぐ下を崩壊することなく横にはってゆく。休戦の望みが濃くなるにつれて米軍はさらに減少をつづけ、洋娼もほぼそれと平行した傾斜で減少にむかう。五三年にはいってからは、両線の差は平均一万人程度と推定されるようになり、オンリー形態そのものさえすでにぎりぎりのところへ追いつめられてしまったことを示している。

だが、洋娼線が徐々に低下してゆくにつれて、保安隊用の娼婦の数が、蛇がかま首をもたげるように増大してきていることは、象徴的で、不気味な感じさえ抱かせる。日本陸海空軍の陣容がととのい、米軍が本国へ引揚げるとともに、洋娼線は極度に低下してゆき、保安隊用娼婦の線がそれを吸収するような恰好で急角度に上昇するであろう。いや、すでにその兆しが、このグラフの上でも見えはじめている。

以上の経過を頭に入れた上で、グラフ（2）以下を見てみよう。グラフ（2）「なぜ洋娼になったのか？」は、いわゆる転落の動機といわれるものを調べた結果である。わたしは

この調査を主として面接によってすすめているうちに、彼女たちひとりひとりの転落動機が、決して「生活苦」とか「虚栄心」とかいう言葉でかんたんにいいあらわされるものでなく、実にさまざまな複雑な要素からなりたっていることを知り、驚かされた。

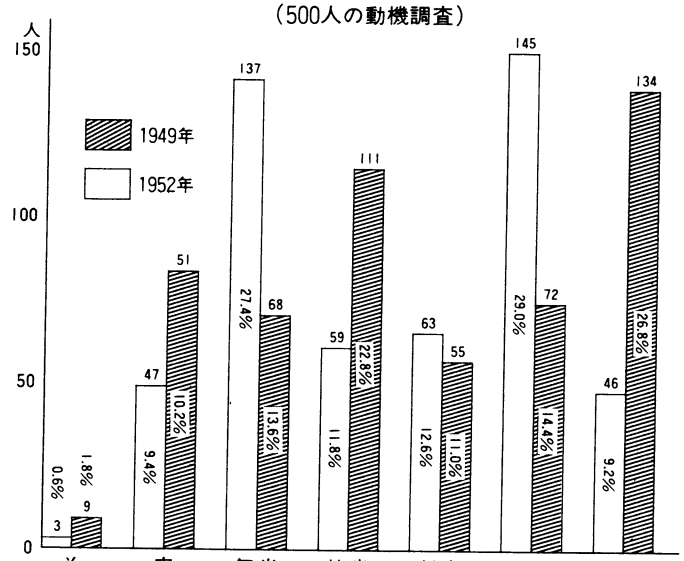
極端な言い方をすれば、ここにあげた七つ乃至八つの転落動機は、それぞれの洋娼が全部身に兼ねそなえているものだ、ということさえできる。各々の実例が端的に示しているように、たったひとつの理由や動機だけで女性は洋娼になるものではない。――しかしそんなことを言っていては、この種のグラフは作ることができないので、このグラフでは彼女たちの転落にとくに決定的な影響を与えた動機、そのことがなければおそらく洋娼にはならなかっただろうと思われる動機のみをとりあげ、二次的動機を全部無視することにした。

けれども、くりかえしておくが、従来、とかくかんたんに、「虚栄心から」「生活苦から」というふうな頭ごなしの理由づけで彼女たちの転落動機を考えたのはよくないし、正しくない。「生活苦から」という動機を主なものとして持っている洋娼で、暴行されているのも沢山いる。また虚栄心からと自分で考えこんでいるような洋娼でも、客観的に見れば、たべるために仕方なく売春しているのだとしか考えられない場合もあるのである。

一九四九年の転落動機を率の多い方から順に並べてみると、「生きるために（生活苦から）」

グラフ(2)　なぜ洋娼になったのか？

（500人の動機調査）



「暴行」「派手な生活に憧れて」「強制され、すすめられて」「家庭不和による家出」「何となく」「その他」となり、五二年の方は「派手な生活に憧れて」「何となく」「強制され、すすめられて」「暴行」「家出」「生きるために」「その他」となっている。

「強制され、すすめられて」「家庭不和による家出」の二つはいずれも十%前後でたいした変動を示していない（ということは、ほかの条件と関係なく、この二つの動機はつねに一定した割合で存在することを示すものである。さらにつっこんでいえば、売春を強制・勧誘する業者・両親・兄弟・友人などが絶えないこと、また家庭の不和――その半数が親と娘との新旧思想の衝突によるものであり、他の半数が養親・義兄弟など複雑な家族構成から生れてくるものである――も他の条件とほとんど独立してつねに存在することを物語っている。）が、「その他」（これは一応無視して話をすすめる。）を除いたあとの四つの動機は、四九年と五二年とを比べてみるとき、実に極端な変動をあらわしている。

「生活苦から」洋娼になった女性は、四九年二六・八%、五二年九・二%と大きく減少した。四九年の百三十四人中九十九人が、大都市又は中都市の中産階級（なみの公務員・なみの会社員・中小企業者など）の女性、のこりの三十五人が農村の開拓者の娘であるに反して、五二年の四十六人は全部が農村の貧農・開拓者・演習地農民・または都市の失業者・日やとい・工場労働者などの女性である。つまり四九年には大部分を占めていた中産階級

出身者が五二年にはひとりもいなくなってしまったということである。都市中産階級の生活苦は戦災や敗戦インフレによる特異な現象だったといえるから、この四年のあいだにその特異な事態が回復し、経済的に立直ったこの階級からの「生きるため」の転落者はあとを絶ったのであろう。

問題はむしろ四九年の三十五人と五十二年の四十六人の方にある。中産階級女性の「生きるため」の転落が敗戦後の特異な現象だったのと反対に、これら下層階級女性の転落は資本主義社会の恒常的・本質的な現象に属するものであるからである。五二年の四十六人はすべて人身売買かそれに似た方法で大業者の支配下に送りこまれ、RRセンターなどの大業者経営の売春施設で働いている。洋娼からもっともはやく「新国軍」用に切りかえられるのは、この種類の女性たちなのである。

「派手な生活に憧れて」転落した女性は、四九年十四・四%、五二年二十九%と、「生活苦」と対照的な割合を示している。この動機から洋娼になった女性はすべて、堕落しなくても食っていけた女性たちばかりである。同時に、堕落しなければ自分の望むような派手な生活ができなかった女性たちばかりである。ひどく貧しいとか、すばらしく金持だとかいう女性はひとりもいない。——彼女たちはもっといい服や、もっといい靴や、ふつうの日本人よりも金持の男が欲しかった。五二年の百四十五人のうち、百二十二人（うち百十

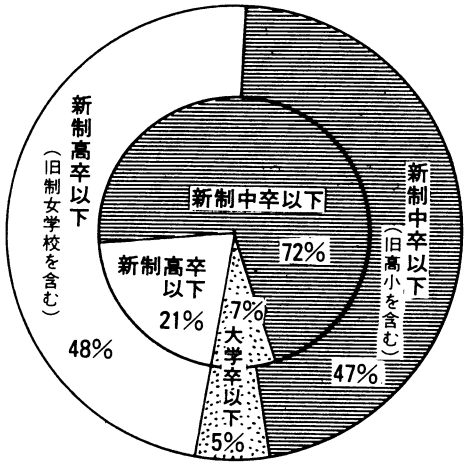
九人がオンリー）までが、「あたしは現在幸福である」と述べているのは注目に値いする。ふつうの日本女性よりもいい服を着て、アメリカ兵から愛をささやかれ、彼らとジープでドライブできれば、それが彼女たちの幸福なのであろう。彼女等を抱く男の腕が同じアジア人の血に染み、ナパーム弾の硝煙で汚れていても、派手な生活さえできればそれで幸福だというのか！

似たような動機に、「アメリカ兵や国連兵とつきあっているうち、何となくやめられなくなって」というのがある。派手な生活に憧れるより先に、派手な生活にひきづりこまれたような場合だ。四九年の六十八人中五十七人が士官・下士官のスペシャル・メイド転落者であり、五二年の百三十七人中九十五人がキャンプ勤務のタイピスト、メイド、又はダンサーの出身である。「何となく」という理由は、さらにつっこんで問いただして見ると、要するにアメリカ兵の肉体的・経済的・慣習的・言語的魅力のとりこになったのでということらしい。ことに彼等とつきあっているうち、背の低い、こせこせした、貧乏な、電車にしかのれない日本の男がだんだん馬鹿にみえてしょうがなくなったという。日本名でよばれることをいやがったり、アメリカ兵との正式結婚を夢みたりするのもこの動機から堕落した者に多い。また、この動機による転落者は一般に学歴がたかく、四九年では五十一人が、五二年では百七人が、それぞれ旧制女学校か新制高校以上を卒業している。

では、この報告の主題であるアメリカ兵・国連兵の暴行と彼女たちの転落とはどういう関係にあるだろうか？「アメリカ兵・国連兵に暴行された結果、絶望したりヤケになって」洋娼になった女性は、四九年百十一人、「生活苦」に次いで二十二・二％の高率を示している。百十一人中八十二人までが四八年一月以前に――つまり米軍がたくさんいた占領初期に犯されたことが、調べた結果明らかになっている。強姦されて慰安所に送りこまれたのはこのうち十七人で比較的少かったが、これは四八年ごろには、「特別挺身隊員」たちはたいてい廃人になるか更生を決意するかして、洋娼群のなかから姿を消していたことによるものであろう。

あとの九十四人が犯された場所は――米軍キャンプのなかで・四十六人、キャンプ以外の戸外で・九人、自宅で・八人、自宅以外の屋内で・三十一人――ということになっている。しかし、犯されてからの環境なり条件が、どうしても洋娼にならなければならなかったような環境や条件だったという女性は、慰安所へ送りこまれた者を除けば、実は決して多くないのだ。（第二部の桜井睦子の場合などはむしろ例外的なものである。）彼女たちは強姦されると、どうせまともな生き方はできないものだと頭からきめてしまうのである。こういった意味では、五二年に調べた五十九人の方が、犯されてからの条件はずっとわるく、いっしょうけんめい立ち直ろうと決心しても外からの圧力で自然に洋娼にさせられて

グラフ(3)
学　歴（内円は一九四九年、外円は一九五二年）



しまった、というのが多かった。

四九年の方が五二年の倍になっているけれども、これはよく考えると、四九年の大部分が四八年一月以前の転落者――占領初期に強姦されたものなのだから、米軍の数が二倍になれば強姦される女性も二倍にふえ、前者が半分に減れば後者も半分に減るということ、つまり彼等の強姦への残虐な欲望は、いつ、どの部隊でもまったく同様なのだ、ということを意味しているように思われる。

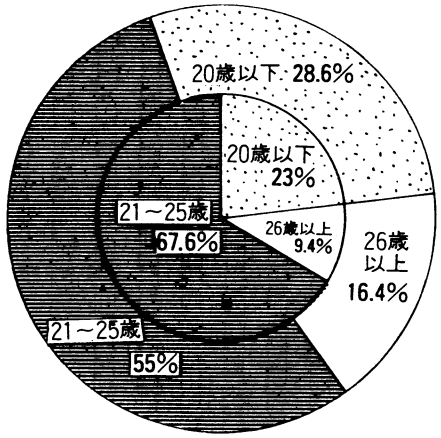
さらに一言つけくわえるならば、これは洋娼になった女性たちのうちで強姦されたひとたちの割合を示すグラフなのであり、このほかにも、強姦されたけれど洋娼にならなかった、という女性が何倍か存在しているだろう、ということを考えていただきたいのである。

さらにグラフ（3）によれば、四九年にくらべて五二年に新制高校・旧制女学校出身者が二倍以上に激増していることがわかる。はっきりいえば、街娼時代の洋娼よりも、オンリー形態をとりはじめた頃の洋娼の方が高い学歴を持っている、ということである。これは「アメリカ兵とつきあっているうち、何となく」洋娼になった女性が五二年にふえていることとくらべてみて、うなずけないことではない。このグラフからでてくる結論は、堕落と学歴とは何の関係もない――学歴が高いからといってそれだけ自主的で知性的であるとはかぎらない、ということであろう。大学卒業者が五二年に二％減っていることが、とくに意味をもつものかどうかは、もうすこし大量の資料によらなければ軽々しく断言できないことのように思われる。

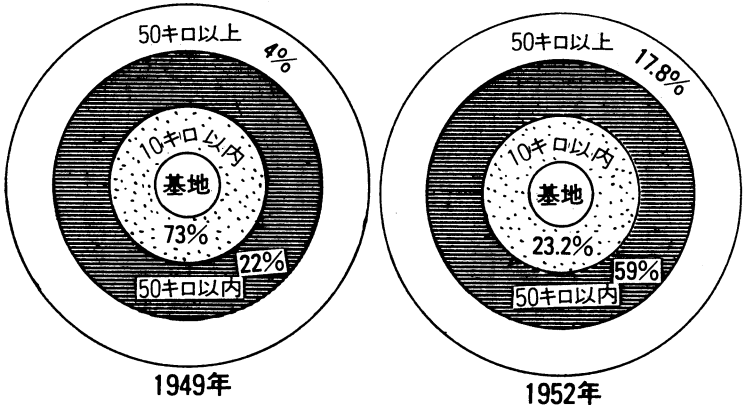
最後にグラフ（4）とグラフ（5）。これは、四九年と五二年で、洋娼の年齢と出身地にどんな変動がおこったかを確かめようとするものである。

グラフ（4）は、四九年に比べて五二年に、未成年者と二十六歳以上の比較的年長者が大きく増加していることを示している。またグラフ（5）は、四九年には基地のごく周辺に限られていた洋娼の出身地が、五二年には非常に遠くの方へひろがっていることを示している。基地はひとつだけでなく、全国いたるところにあり、ことに五二年には日本全土

グラフ（4）
洋娼の年齢（内円は一九四九年、外円は一九五二年）



グラフ（5）　洋娼の出身地
（基地からどのくらい離れた所に住んでいたか？）



の完全軍事基地化が完成されていたから、ある基地の十キロさき、遠くとも五十キロさきにはたいてい別の基地があり、さらにその基地の五十キロ隣りにもまた別の基地がある、という状態、つまりグラフ（5）のような円が日本全土にいくつもいくつも重なっているような状態が生じていたわけである。

いいかえるなら、四九年には、洋娼を出したことのない土地が日本のあちこちにたくさんあったにも拘らず、五二年にはほとんど日本全土が洋娼の出身地になっていた、ということがわかる。洋娼の発生基盤が、場所によって人数に差はあっても、地域的に可能なかぎり拡大されてしまったのだ。

このことは、そうした多くの日本女性たちが、潜在的に、「征服者に愛されたい、格好のいいガイジンと結ばれたい、できれば花嫁としてアメリカへ渡りたい」という憧れと欲求を、心の底に強く持っていたことを感じさせる。――しかしそれは彼女たちだけだったか。男でも、相当多くの日本人が、どんなに辱められ踏みつけられても、強い大きな者のほうへニタニタすり寄っていく、犬のように卑劣な性質を持っているのではないか。

だからこそ、最初、大量の米軍用慰安婦の群れを、ほかならぬ日本の権力者自身が意図的につくり出した、という信じられないような事実も生じたのだ。

権力の構造が変わらない以上、こういう巧妙なダマシや強制は、これからも形を変えて

つづくと見るほうがいい。彼ら日本の権力者の一部が、自分の保身のため、人のいい国民を、強い大きな者にいつでも売り渡す性質を持っていることを、私たちはこれからもよくよく見ぬき、警戒して未然に防がなければならない。この本に描かれたような悲惨を二度とくりかえさない保障は、（こんどこそ戦争に巻きこまれないようみんなで力を合せることとともに）まずそこから始まると思う。